

# 第九章●根岸地区

## 第二節●根岸村から

### (1) 山手の周辺として

●近世——この章で扱うのは根岸地区である。この地区は根岸町・山元町など一九カ町、それに工業埋立地千鳥町を含む範囲で、面積四〇〇・六ヘクタールである。このうち千鳥町は一三〇・二ヘクタールで、およそ地区の面積の三分の一を占める。地形は根岸町や麦田町などわずかな平坦地のほか、ほとんどが丘陵地である。東は本牧地区、西は磯子区、南区に接している。

この地区のほとんどは旧、根岸村(根岸町)の区域である。便宜上、この地区を南部地区と北部地区とに分けることもある。地区のほぼ中心的な町としては、南部は根岸町、北部は山元町とした。なお、この根岸町というのは、昭和二年十月一日、区制施行の際、磯子区に西根岸町・丸山町として一部を分離した後の根岸である。

根岸地区の近世も『新編武蔵風土記稿』によって、その輪郭がうかがえる。江戸中期に現在地に鎮座したといわれる根岸八幡社

を中心とした根岸村(町)は、東京湾に漁場をもつ漁村であった。村には村のさまざまな歴史を経てきたが、特に根岸の場合には狭い漁場での資源を確保するため、苦勞がともなっていたようであった。例えば文化十三年(一八一六)、江戸湾をめぐる武蔵、相模、上総の四四の漁村が協定し、新規の漁具漁法を用いることを



山手・根岸外国人遊歩道略図(部分)

禁止しているが、これとて根岸ももとより例外ではなかった。そして、以後この協定が守られ、慶応元年（一八六五）にも、根岸村名主権太郎をはじめとして、久良岐郡一三の漁村と、三浦郡の八つの漁村とが、海苔ひびに新しい方法を用いないことを約しているといったようなこともあった。

●外国人のために——根岸の漁村としての規模は明治三年（一八七〇）の明細帳によれば、根岸村所有の五大力船は八隻、漁船は六一隻とあり、同二十年の記録では漁船六五隻とあり、その規模にはあまりに変化がない、昔ながらの漁村であったことが知れる。こうした漁村を中心としたこの地区に、いわば公的な施設ができたのは、元治元年（一八六四）十一月二十一日「横浜居留地覚書」によって外国人遊歩道、競馬場、鉄砲場（角打場）の約束がなされたことに始まったといえる。さらに明治六年には地蔵王廟、そして運動競技場のアスレチッククラブ（のちのYCAC）というように、開港場から、当時としては遠くはなれたこの地区も、居留外国人のための施設に利用されることになった。これらの施設はいずれも、覚書など諸外国との約束ごとにもとづくもので、横浜開港推進のための一翼を荷なったものであった。

外国人遊歩道は、根岸地区では、不動坂を経て旧・競馬場方面への部分がそれである。

いまも不動坂は自然の樹木が残る数少ない坂道だが、おい繁る樹木は、かつての遊歩道のありさまを想像させてくれる。外国人



根岸村——遠景は木柵



根岸の砂浜に沿った新道



不動坂から根岸村の眺望



根岸の茶屋——現、根岸旭台〈“市民グラフヨコハマ” No.46より〉

遊歩道は、元町の谷戸坂から、北方、小港を経て本牧天徳寺から本牧原、和田、池田、間門をぬけて根岸村不動滝の下から八幡橋に至る海岸線、又は逆行して不動滝の下から字相沢に出て山手丘陵の頂点、現在の山元町通りと谷戸坂上で合流する道路で、幅三間（約五・四五メートル）、延長一里二町（約四、〇三六メートル）であって慶応元年九月完成した。

さらに慶応二年（一八六六）の約書によって、遊歩道は一段と整備され、外国人に大いに利用されることになり、村では外国人との接触も次第に多くなった。幕府は各国に相談して、この沿道の民家一三戸に命じて、外国人の休憩所を開かせた。やがてこれらは軒先を改造して椅子やテーブルを備え、飲み物や果物を用意するだけでなく、若い女性の接待を加え、結局は、酒色を提供することになった。いった。

●白滝不動——こうした外国人遊歩道のなかでも、特に自然景観に富んだ根岸、その白滝不動はこのほか喜ばれたという。『横浜市史稿・風俗編』によれば、白滝不動の下は不動の参詣者を中心に賑わいを見せた。向う地と呼んだ房総から、舟でやってくる人々も多く、数軒の酒楼では媚を売る女性も置いていたとされている。

もともと、この白滝不動は、内湾を一望に収める眺望のきく丘で、境内の滝が著名であった。滝の長さ一丈二尺（三・六メートル）、はば一尺（〇・三メートル）、滝つぼは約五坪（一六・五二

平方メートル)、さらにそこから滝となって高さ六丈(一八メートル)、はば二尺(〇・六メートル)、直線に落下する滝は、ことのほか人々の眼をうばい、見物に来る人も多く行楽の地として親しまれていた。

ブラックは紹介している。

「寺は大日大聖不動明王の神—不動尊の尊称でつねに語られている—に献げられている。寺のかたわらに、丘の中腹から切り出された小さな石の水鉢がおいてある。その鉢に一つの水の流れが、滝の口を通って落ちこんでいる。

信心深い信者たちがここに來て手水をつかい、祈りをささげる。しかし、この水は病氣や病弱に悩む人たちに、病いをいやす不思議な力があると、次第に一般から思われるようになった。このようにして、一種の尊敬の念をもってみられ、特に不動尊の加護の下にあると信じられるに至った。この流れは、ほかならぬ上の土地の排水の役をしている普通の小川からひかれている。しかし、頭上八フィート(二・四メートル)ないし十フィート(三メートル)の高さから、一筋に落ちてくる滝の水にたえることのできる人にとつて、この水に打たれることは、大いに元氣を与えられる効力をもつかも知れない。昔は、この水鉢はもっぱら女子に使われ、滝の下の方は男子にあてられた—しかし今は、すべての人が滝の上の方を使っている」(『ザ・ファー・イースト』明三・十一・一 大野利兵衛抄訳)

●地区編●第九章—根岸地区



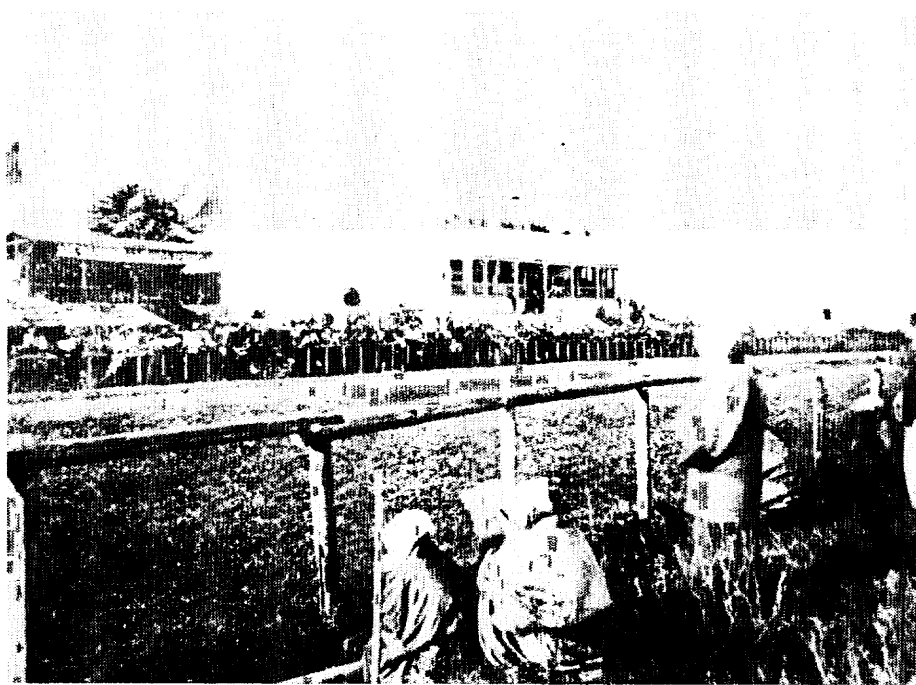
根岸の新道—一見、根岸町3丁目不動坂下、正面小高い丘に白滝不動が見える

●競馬場——競馬場や射撃場は、元治元年の「居留地覚書」によって、幕府がその設立を實行しなければならぬものだったが、その実施ははかばかしくなかつたようであつた。

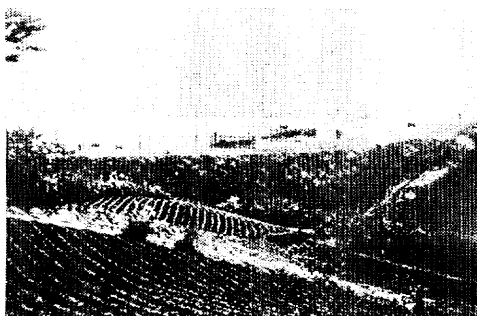
競馬場は一万五、〇〇〇坪（四・九五ヘクタール）、慶応二年の居留地約書改正によって許可となり、日本最初の洋式競馬場として発足した。

内外貴紳紳商のレクリエーションの場として親しまれたが、明治天皇も十五年（一八八二）五月以来三十二年（一八九九）五月にいたるまで二回、この地で見物されている。「山元町の通りは行幸道路といわれ、近衛騎兵が先がけて天皇旗をひるがえし、四頭立ての馬車がカラカラと走る。沿道の人々は土下座でお迎えしたものです」と地元の古老はいう。十七年には日本競馬倶楽部が組織され、西郷従道やモンテギュー、カーキードが県との間で貸借契約をむすび、以来日本人も会員となることができ、明治初期では日本唯一の大競馬場として内外に宣伝されたものであつた。

●鉄砲場——鉄砲場については、英国公使が、老中にたいして、「たびたび神奈川奉行に商議して、ライフル砲発射の場所を定めてほしいと交渉しているが、今までにも実行されていない。ライフル砲の発射の場所は、地所を囲うのではなくて、弾道に人が入るのを防ぐ手だてをする。発砲しないときは、往來の道として使える、この上ひきのばすことなく射場をきめてほしい」という



競馬場の大スタンド——ほほかむりの日本人も見物



造成されて間もない競馬場——現、池之上あたりからの眺望、畑で一軒の家もない

書翰がだされるなど『横浜市史・第二巻』の督促・交渉が重ねられ、その結果、ライフル試射場としてイギリスに九、〇一六坪（二万九、七九七・八八平方メートル）が貸付けられたのであった。これは、山手の英国屯所の付属設備の一つであった。このライフル試射場（鉄砲場）は、英国の工兵隊によってつくられ、外人の射撃演習の場とともに、彼等の幕府にたいするデモンストレーションの場ともなった。明治四年十二月から日本の軍隊も試射するようになったが『神奈川県史料・第七巻』、次にあげる話は地元古老の聞き書きである。

「私の祖父又五郎は、土地の人で、大正元年に亡くなりましたが、俺は悪事をしたことはねえと、チョンマゲを死ぬまで切らなかつた、頑固な昔気質な人間でした。その祖父の仕事は、もともと宮大工でしたので、何かにつけて、鉄砲場のことにひっぱり出されたようです。

鉄砲場での祖父の仕事は、射撃の日には仮小屋を建てたり、机や腰掛などを作りました。それと射撃場の玉留めというのがあって、その前の方に、長さ十間（一八メートル）、幅八尺（二・四メートル）、深さ八尺ぐらいの壕を掘るんです、そして、太い木の枠を作つて、その枠にズックの布を張り、まんやかに三尺（〇・九メートル）ぐらいの円を書くのだそうです。標的ですね。

鉄砲場の左側には、根岸方面へゆく道がありますが、その道には、ところどころ小山が築いてありましたが、それが玉よけにな

っていたといいます。

それに鉄砲場の中央に小川があり、中川と呼んでいましたが、今の千代崎川です。この川の中央に長い旗ざおを立て、射撃のあつたなしを知らせたということです。またここには、毎日、イギリス、フランスの兵隊が訓練に来たそうです。野砲をひいて来ることもあり、時には軍楽隊を先頭に足並そろえて行進して来ることもあつて、その様子は実に壮観だったといひます。

イギリス軍の服装は上下ともに赤色で、ズボンには白い筋が入つていて、へんな帽子を曲げてかぶり、体がでつかくて、それはりっぱだったそうです。これらの兵隊を赤隊と呼んだり赤トンボと呼んだりしていました。

一方のフランスの兵隊は青黒色の服装で、日本の海軍の水兵服のような格好だったので、フランスの兵隊のことを青隊と呼んでいたといふことです」（上野町 古谷又市氏手記）

鉄砲場は、現在の国鉄根岸線山手駅前から地方道高島本牧線までの、商店街の直線道路がそれであった。

●山元町——居留外国人のための施設が造られていったが、それはこの地区にはそぐわないものだった。地区一帯は丘地で、谷戸田がその丘に喰い込んでいたような状況のありふれた土地にすぎず、農・漁業の村として、ところどころに小さな村落を形成しているにすぎなかつた。明治に入ると、山手のはずれに当たる競馬場の入口には、街並みができはじめていた。明治三年頃に

スイス・ライフル大会——白煙が上つている



は、中村と根岸村の境に当る畑地にも家並みが見られはじめ、明治六年、街並がととのったところに一、二丁目を置いて山元町が誕生した。山元町を中心とした街ができると、その奥地に当る相沢には、清国人の墓地が設置された。

●地蔵王廟——明治六年（一八七三）三月、村内の字大尻（現、大芝台）の民有地一、〇〇〇坪（三、三〇五平方メートル）が買収され、一カ年一一〇ドルの地料をもって清国人側に貸与され、翌七年四月には、さらに二五五坪（八四二・九平方メートル）が追加されて、のちの二十五年十月、在留清国人一一二人の拠金によって「地蔵王廟」が完成、墓地となった。

ここは在留清国人にとって本埋葬の墓地というよりも、功なり名とげて故国に帰るまでの一時的な墓地であった。いま民家と民家との間の、狭い石畳のなだらかな道から奥に、華麗な山門がある。ここが廟の入口である。山門から正面に、煉瓦造りの建物があつて、その入口に「慈雲照五嶽」「佛像寄扶桑」と大書された聯が両側に掛けられている。廟内には中国風の帽子をかぶった金色の地蔵菩薩がまつられている。地蔵菩薩の左右に位牌がぎっしりと安置されている。右側が男の、左側が女の位牌だという。この廟は大震災にも耐え、また戦災からもまぬかれたものである。廟の上、墓地の左側に六角堂「安骨室」がある。寺塔風の黄色三色層造りで、見上げると、空に鶴が重なって飛んでいるように見えるところから、黄鶴楼と呼ばれている。



ここに地蔵が祀られている



地蔵王廟——朱塗の門

こうした地区の中で、山元町だけが、競馬場と山手の中間にある町として賑いを見せることになった。

●相沢墓地——山元町の隣りの相沢はまだ家も建っていない土地であった。明治十年、現在の塚越、大芝台の地に、八、八五四・七坪(二万九、二六四・七八平方メートル)をもって相沢共葬墓地が造成された。明治八年、北方の天沼にあった東漸寺もここに移転してきて、それ以来、明治末期には東漸寺、大円寺、西有寺、円大院の四カ寺が移転、建立され、集まり、あたかも、中区における寺町となった。

二十二年十二月、根岸村から相沢墓地の管理を市が引つぎ、市営相沢共葬墓地となった。ここには開港以来の著名人が眠っている。現在数カ寺の埋葬地となっている。

## (2) 田園根岸

●居留地の隣接——明治も十年頃に入ると、外国人遊歩道はその役割を次第に必要としなくなっていくが、それにもなって、遊歩道に設けられた接待の店は、十年前後には、北方、本牧に移り、その数で三十数軒が生まれた。さらに明治二十五、六年には本牧方面に三〇軒あまり、山手の下、桜道にかけて、七、八軒ができチャブ屋の全盛のものになったといわれている。

一方、山手居留地の外周部にあたる根岸の北部の柏葉、鷺山、竹之丸方面には、外人住宅がぼつぼつと建ちはじめた。畑は相変

らずの野菜の供給源であったが、山ぞいの原野や山林には、新鮮な牛乳を供給する牧畜業が発祥してゆくのであった。

●丘と水田と——明治十四年(一八七八)刊行の『横浜実測図』をみると、根岸地区の北部、現在の麦田は一面の水田で、鷺山、竹之丸、西竹之丸はすべて畑地であった。ひだのように入り組んだ丘すそには水田、付近には宅地はほとんど見られない。麦田の水田が中断され、そこを起点として鉄砲場が台地の仲尾台まで達している。それは幅広く直線で、明らかに人為的な区画となつてゐる。図では TARGET PLACE FOR SHOOTING(射撃場)と記入されていて人家はない。また隣接の立野や仲尾台も丘地、現在の国鉄山手駅あたりは細長い田である。

一方の山元町は、中央部に山手からの道をはさんで一区画の宅地がつつき、街並みが見られる。山元町三丁目あたりから分岐して大平町、箕沢、そして山元町五丁目まで、三つの細長い谷戸田をなしている。

この谷戸田わきには、すでに大芝台の相沢共葬墓地、そして地藏王廟敷地の区画が歴然としている。その他はこれまたすべて丘地で、ところどころに山林が見られる。

しかし、この地区でむしろ不自然とも見える楢田型の競馬場が見える。しかもそれは大きな空間である。図に RACE COURSEとあって、中心部は山元町五丁目からの谷戸田を切った走路が盛り上り、造成されたことが一目で判る。西側には馬見所が





明治14年横浜実測図（部分・根岸地区）

ある。現在の観覧スタンドである。スタンド裏の箕(筥)沢や寺久保、塚越ともに丘また丘である。

さらに南部地区の、現在の根岸町は東西に長く、町域の南には海岸、北はきり立った崖を負っていた。海岸には本牧から直線の道が走り滝頭方面へぬけていた。さらにこの道から三つの坂で崖をこえ現在の豆口台、矢口台、そして根岸の北部の地区へと連絡している。

三つの坂は、現在の、加曾台を経て豆口台への坂(七曲坂)、滝の上への坂、そして旭台からカーブし旧外国人遊歩道の一部の根岸台への坂(不動坂)となっているが、現在不動坂以外は、雑草に覆れながらも細々とその役目を果たしている。

この地図で見る限りは、池袋、根岸加曾台、滝ノ上、根岸旭台、それに矢口台のいずれもが一带に畑で、この横浜実測図の示すものと現在とを比較しても、内陸部ではさほど大きな地形の変化がみられていない。水利について見ると、根岸村の用水は『横浜市史稿・地理編』によれば、猿田川の水をもって字猿田、相沢、柏葉、麦田の水田に、箕沢川からは字寺久保、箕沢の水田に、江吾田川からは字仲丸、江吾田の水田に、清水川からは字清水、沢田、仲田の水田に、それぞれ引用したとされ、さらに根岸村村内にはたて七六間(約一三六・八メートル)横二六間深さ六尺(約一・八メートル)の溜井があったが、これはもっぱら本牧本郷村で使用されていた、とされている。

●西洋野菜——この地区の加曾などの田は、谷戸田で米作も行われたが、わずかであり、丘陵地一帯の畑地には、アワ・ヒエ・キビなどが多く作られた。明治に入って、この根岸地域一帯には、いままでの野菜のほかに、外国人の需要を満すため、西洋野菜が栽培されるようになった。

横浜では、文久三年(一八六三)頃、居留地のイギリス人カーチスという人が、はじめて山手方面で、レタスやキャベツ、カリフラワー、ジャガイモ、キャロット、タマネギ、アスパラガス、トマト、ラディッシュ、イチゴなどを栽培したといわれ、根岸村でも、土地の人清水辰五郎、近藤伊勢松らがその有望性を知って種子を手に入れ、熱心に栽培したのがはじめてで、やがて広く普及するようになったという。

また明治十年頃から宮崎留五郎は、港町青物市場の委託を受けて、アスパラガス、朝鮮アザミの栽培に成功している。

しかし、こうして栽培した西洋野菜も、地域の人は食用とはしなかった。例えばトマトは赤ナスといつて食べれば髪が赤くなるといつて敬遠したものであった。

西洋野菜作りは、この根岸地区のほか、本牧方面でも作られていたと見られるが、確証は得られない。しかし鶴見では、文久三年(一八六四)に左衛門がトマトを作って、西洋野菜の先覚者となったとされている。『鶴見区史』その鶴見の場合、作付面積は明治十年で六反(約五、九五〇平方メートル)、二十年頃五・六

町歩(約四・九五―五・九四ヘクタール)にのぼった(前掲書)とされているが、根岸でも十五年には二町歩(約一、九八ヘクタール)に近い作付けとなり、西洋野菜専門の農家もあらわれるようになった。

●根岸のにぎわい―根岸村は、幕末から明治中期に入っても、町域の形状はそれほどの変化を見せなかったものの外国人遊歩道当時から、不動下は相変らずのにぎわいがあったという。

房総、三浦方面の漁業関係の人々などが船でここに来て、不動尊への参詣をかねて遊ぶものも多かった。黄金屋、角海老、石崎、滝ノ屋、などの茶亭や、はたごが軒を並べていた。しかしこれも明治中期になると次第に廃業して、大正期には数少くなっていた。

根岸村は不動下のにぎわいにも見るように根岸地区にとって、中心的地点であったが、ともなつて村内住民の組織的な活動もかなり活発であった。

### (3) 村と開発

●消防組織―明治期の根岸村については、記録がないので詳細は不明だが、その村政のうち、次の例があげられる。明治二十年根岸村村会は消防議定を定めた。村内の滝之下四〇人、仲四〇人、加曾三九人の連名によって組は組織された。この消防組織は前年の十九年、加曾においては、すでに龍吐水、長トビ、サスマタ、

ハシゴなどが準備されていて、保有が記録されている。

横浜においては、万延元年居留地外国人の自衛のためポンプが購入され、慶応二年豚屋火事に刺激されて以来、明治三年には消防器具が充実されて組織改善され、十五年(一八八二)七月消防規則が制定、警察の事務に統轄されてゆき、二十年(一八八七)十月上旬水道敷設までこの制度がつづくが、この根岸村ではまだ水道敷設もなく、新式にはほど遠かったが、消防の組織を強化しようとしたものであった。

●村の懇親会―これは、村の人々によって具体的に組織された例であるが、断片的な資料によれば、私的な村人同志の会合もしばしば行われていたようであった。

どんな機会に開かれたか不明だが、明治二十五年(一八九二)三月、根岸村の人たちの懇親会が行われている。根岸村村民六八人の人たちの集まりで、『根岸村懇親会人名簿』によると、経費六円二〇銭、大久保、水車の井上という人からはそれぞれ二円の入金、清水から五十銭の入金、支出は酒代三円、弁当代三円五〇銭、席料二円、女中へ一円、下足一〇銭といったような例がある。しかしこのような親睦会も、日露戦争の頃になると、「出征兵士送別会」や「凱旋祝賀会」へと、親睦会の内容が変っていった。古い村の形態のままにつづく根岸村をいして、二十二年(一八八九)の市制施行時には、根岸地区においては、山元町のみが市域に編入された。これは全市一三八カ町のうちの一つで、打越

の山をへだてていても、関外と関内との接触による影響は多く、港の外周部としての街並みがととのつていたからである。

●初期の福祉施設——街並みがととのつてゆくなかでこの地区には、明治二十二年アメリカ人バンベデン、二宮わかによって困窮者家庭救済のための託児所が開設された。二十五年には四カ年修業の尋常科を設けて、小学校と託児所とを合せ、三十三年には警醒第二小学校と称され、木造二階建て、三〇三・五坪（一、〇〇三平方メートル）の学校で、地元ではお助け学校と呼ばれ、喜ばれた。

次いで三十六年五月、県によって薫育院が設置され、三十八年二月、二宮わかによって相沢託児園が開設された。これは日露戦争戦死者の遺児の生活困窮を援助しようとして、開かれたものである。翌年に警醒第二小学校に包含された。

このような福祉のための施設の一つに、大正二年に建てられた、恩賜財団済生会みな川病院があり、翌年から市内の貧しい人のために巡回診察も行うようになった。病室八〇室、別に隔離病室二八を持ち、一日百人以上の患者が診察を受けた。

●根岸の漁業——明治三十五年漁業組合法が制定されると、根岸でも他と同じように、その翌年六月に根岸漁業組合が設立された。組合員五人、初代組合長は大久保佐左衛門であった。しかし漁法は従来通り小規模なもので、漁獲物は少なかった。この頃の漁業について老人はつぎのように語っている。

「手ぐり、四人引、六人引、マス網など、いろいろな網を使ったが、手ぐりは底引きだから、いろいろな魚が入ったな。春先にはアナゴ、タイ、ヒラメ、アカエイ、クロダイ、カニ、シバエビなど、夏にはクルマエビ、カレイ、スズキ、アジ、キスで、六月から一〇月にかけてタイ、マダイが獲れました。このマダイは潮の流れによるので、むづかしく、十五日出て二日ぐらいしか獲れませんでしたね。シャコは年中獲れたものです。

ワタリガニもよく獲れたのですが、渡世人みたいなもので、今日獲れても明日はだめ、ということが多かったですね。ハマグリは四年経たものでないと料理屋で買ってくれないんです。組合で一括養殖しました」（根岸町有志座談会）

「根岸で獲れたものは、三丁目のボテイといって、今の仲買人ですが、漁師が集団でそこへ持って行き、入札させました。それでも余ると、掘割川をさかのぼって中村川に出て、港町市場に行っていたんです。やはり個人売りが多かったな。昭和初期には四貫目のタイで二円、カニは二〇銭、シャコはバケツ一杯一五銭でした」（同座談会）

山元町の人たちはつぎのように言う。

「夕方になると、カニとかシャコとか小魚を入れた籠を背負って、根岸の年増女が戸口戸口を売り歩いてました。私たちは、しよいびくさんと呼んでいました」（第六地区有志座談会）

●根岸村社会——三十四年（一九〇一）四月一日、市域の第一次

拡張によつて、根岸村は本牧村や中村とともに横浜市に合併し、根岸町と改称された。根岸村会はこの時点で解散するが、これまで行政機関としての根岸村村会は村行政のために活発な動きを見せていた。

村長、助役のもとに書記一、収入役一、ほかに使丁の組織があり、村会は議員一人で構成されていた。市編入直前の村長は、大久保佐左衛門。各議員の氏名は伝わっていない。

いま、村会に関する資料は、皆無といつてよいが、二十二年から市編入の直前までの予算、決算書の一部によれば村会の歳入の主なるものは、二十二年の場合、村税、雑収入、借入金、国庫下渡金、地方税交付金であつて、村税は地価割、営業割、戸別割で、現在の固定資産税、市県民税、営業税に近いものである。雑収入は小学校の授業料、それに小学校の糞尿売払代金となつている。借入金の借入先や、国庫下渡金などについて、その基準や率、村税の賦課、徴収方法などは不明である。

三十三年（一九〇〇）の場合には、村税を筆頭に雑収入、それに繰越金、使用料及び手数料、地方税補助、寄付金、国庫交付金がこれに加わつている。村税には、営業、家屋割それに所得税割、営業税割が入つているが、いずれも地租、地方営業税、所得税などの付加税である。雑収入の糞尿売払代は消え、小学校授業料のほか村税の延納による、いわば延滞金がかつている。また使用料及び手数料は、戸籍の手数料が主なもので、戸籍簿閲覧、届書受

理・証明手数料などである。

一方歳出については二十二年の場合、役場費（給料、雑給、需用費）、会議費（議員実費弁償）、土木費（道路、橋梁修繕費）、教育費、衛生費（種痘所給与等）、流行病予防費（生石灰代等）、救護費（行旅困難人救護費等）で、人件費が大部分となつている。年間の報酬として村長八〇円、助役七〇円、給料として月俸書記九円、収入役七円、使丁四円である。

三十三年の歳出については、科目は二十二年とほぼ同じであるが、それに消防組員の月手当、出場・演習手当などを内容とする警備費が加り予算額は全体の五・七パーセントにあつている。

特徴的な歳出としては、二十七年に、根岸村外三方村共同避病院費負担一九円四七銭がみられる。これはその年度の一・三六パーセントに當つている。三十三年度、この年の歳出予算は四、八六四円三四銭五厘のうち土木費は八四六円二七銭九厘で、一七パーセントに達している。このうち四一五円七銭八厘は旧外国人遊歩道の修繕で、沿道の人家の増加にもない、雨水の流通をかねて陶製の下水管を敷設することとか、海岸の護岸修繕を行ったものであつた。

ほかに川のしゅんせつ費四一五円五厘、橋修理一五円として使われているなどの実例をみることができる。

しかし町となつた根岸地区の一帯は、明治末期に、部分的に土地の利用がされたものの、依然として丘陵に畑がつつぎ、ところ



白滝不動の前通り——正面は不動尊の森、左が不動坂入口、いつもはひっきりなしに自動車交通が多い

どころは疎林、低地は谷戸田であった。明治はじめに、正式な町として誕生した山元町でさえ、小規模な店のつづく表通りの街並みを除いては、墓地相沢あたりは深いくぼみで、水が溜れば自然の池のようになったという。

競馬場からまわりの丘地、農道が網の目のようにつづくなか、まばらに人家が少しづつふえてゆく程度であった。字加曾など、不動尊の下の漁村としての一帯(現、根岸町)も、旧村時代の形態を色濃く残していたのであった。

●凱旋祝賀——その一つの例として、根岸町では明治三十九年三月に、日露戦争出征兵士の凱旋祝が行われた。明治三十九年三月二十四日の『凱旋祝諸費用帳』によれば、その収入は、滝之下・東など各講中からの入金で、繰越金(四四八五銭)を加えて、合計一七五四六九銭(三十八年一月から十五カ月間)。支出は、花火、ローソク、旗などの物品代と、凱旋祝賀費(八一四四三銭)、横浜凱旋式入場料(一〇円)などが支出の主なものであった。

凱旋祝の支出は、ウルチ四斗一升、ササギ三升を使っての赤飯、二〇〇本の手旗、五本の花火打揚げ、二九枚の写真撮影、一五枚の感謝状で合計一三五四四三銭である。村民あげての祝いであり、かつ村民の一種の親睦でもあった。

また、『親睦会収入簿』によればは、出征兵士のために餞別金を一人一円から三円を六人に送り、さらに戦勝祈願の護摩をたいている。それには三〇銭を奉納している。

そのほかは「慰問金」としての支出で、一人当り五〇銭、その人数は一四八人を数える。その地域的範囲は現在の中区、西区、南区、磯子区の各一部で、次の一七団体にわたっていた。

末吉町誠進会、本牧原軍友義会、根岸町真徳会、山中村兵事義会、吉田町柳町尚兵会、寿町奨兵会、松影町星義会、長者町有志会、不老町軍人奨励会、石川仲町石川有志会、根岸町恤兵会、元町軍人奨励会、海岸誠義会、不老町一二三団、永真会、英親会、霞清会などであった。

●各地の開発——明治の後期になると地区は、部分的に土地の利用に変化が生じていった。山手の坂つづき山元町の周辺には、三十四年(一九〇二)二月西有寺が西有礪山によって創建された。この寺に二十九年九月太田治兵衛が敷地一、二〇〇坪(約三、九六六平方メートル)を寄進したことにはじまり、万徳寺別院として開堂されていたが、のち二宮の善光寺を移し、西有寺としたものであり、相沢墓地入口に当たっている。

また、三十五年十一月、字仲尾、沢田の官有地が下付され、三十六年には民有地となって、外国人の墓地として、必要に応じて順次貸付けが行われた。現在の仲尾台中学校下の仲尾台外人墓地のもととなった。

山元町方面が部分的に土地利用されるなかで、市街地発展の延長線上にある麦田、その先の大和町は、旧態のままで、鉄砲場という呼称もそのままだった。土地の人々が「天沼のビールから出

る石炭がらをどんどん埋めてくれましたので、家が次々と建てられていきました。けれど一メートルも掘れば今でも水が湧いてきます。もう少し掘ると茶色の水が湧いてきますね」(第三区有志座談会) というような土地にもかかわらず、このあたりも次第に開発されていった。

開発がはじまる頃、明治四十年に市川彦造がメリヤス業として独立し、鉄砲場に工場を設けている。市川は、東京でのメリヤスの機械編みの先駆者上村順道に宮川善吉、栗田丹藏とともに養成された一人で、横浜メリヤス工業の先駆的存在であった。(『横浜経済文化事典』)

●大和屋―次いで四十三年(一九一〇)九月、〇・五馬力のモーターをもって大和屋商店が、絹、木綿、下着工場を建設、同業中唯一の大工場を持つ業者として大和町で操業した。大和屋はYシャツ店として著名で、店は弁天通りにあった。

「このときの工場は、土台は石造、近代的にガラス張りの明るい工場でした。震災では倒壊しなかったのですが、あとに発生したうしろのがけの土砂流によってこわされました」(調布市 石川文寿氏談)

店主石川清右衛門はこの工場の傍に別荘をかまえ、旧鉄砲場一帯の土地が県に移管されたのち、このほとんどの土地の払下げをうけて一帯を開き、家作を建て街並みを作った。そのなかには、第六天稻荷社が勧進された。

●さらに開発―鉄砲場はこうして中央に道路を直線に通して街並みが造成されたが、これも一地点の土地利用にとどまり、地区全体の変化をうながすまでにはいたらなかった。ただ特徴的なことは、根岸町においては、四十二年四月、三九三番地に、幼年保護会家庭学院が感化事業施設として創立され、さらに四十五年七月には五坪(一六、五平方メートル)の家屋を改造した病室を持った根岸療養院が二、一四九番地に建てられたことである。

一方、四十三年には根岸町字竹之丸に横浜ブレード株式会社が発立された。四馬力のモーターを備えた工場で、ブレードの製織と販売をはじめするなど、次第に土地の利用がなされていった。

大正のはじめには竹之丸の丘の上に横浜基督教訓盲院の校舎(三五〇坪(一、一五七平方メートル))が新築された。この学校はキリスト教の教義にもとづき、目の不自由な子どもたちを教育する学校で、この地区の象徴的存在となって現在までつづいている。

訓盲院は、明治二十四年(一八九一)九月、アメリカ人ドレッサー夫人が目の不自由な人たちの救済のために、石川仲町五丁目に見人福音会を設立したのにはじまっている。二十七年三月には梅ヶ枝町に移転し、三十二年以降は火災などによって不老町二丁目、石川仲町四丁目、中村町、蓬萊町というように、ほぼ毎年のように校舎位置を変えて、ようやく竹之丸の現在地に落ちついたものであった。『光を求めて九十年』(横浜訓盲院刊 昭五十四・

十・二)によれば、盲人福音会は三十三年一月、県から私立学校の認可をうけ、大正二年四月に現在地に五八〇坪(一、九一六・九平方メートル)の土地を買収し、ようやく安住の地を得て木造の校舎、寄宿舎を建て、通学可能な児童には通学を認め、不可能な者は職員とともに生活し、教育を行うという形態をとった、とされている。当時この竹之丸は「まだ人家もまばらで、あたり一面は草木が生い繁る東南向の丘の上であり、環境的には、これまでの下町界わいとはおよそ異なっており、閑静で自然に恵まれた土地」であり、「まさに神が与えて下さった恵みの場所」であったという。(前掲書)

●近代的——明治末期をむかえた根岸地区に、ようやく近代的な曙光が見えたのは、四十四年(一九一)に横浜電気鉄道が本牧原まで開通したことであった。これに関内・関外と本牧・根岸とが平面的につながるようになった。麦田には山手から西の地区のど元といえるトンネルがあることよって、重要な地点となった。このトンネルの開通により本牧、根岸が本格的に開発され、発展していくことになった。大正元年大和町にも停留所ができ、街並みも整って行くことになる。



麦田のトンネル (明治44年頃)





明治末期の街並み——麦田界限



横浜電気鉄道沿線（現、大和町付近）

## 第二節●変転のもとに

### (1) お不動さまと榊祭

●外国人住宅——大正期に入ったこの地区は、依然として関内の近郊的存在であつて、緩慢な変化を見せていた。

この地区は、漁村としての根岸のほかは畑と山林、畑には西洋野菜の栽培、山林のはざまには外国人住宅、原野には牧場が点在するといったような、静かな山手の外周部としての性格を持ち、旧態は依然としてつづいていた。

ただ、大正初期の特徴的なこととして、この地区の北部地区の丘陵地には、外国人の住宅が建てられはじめたことであつた。

この外国人住宅は鷹山、柏葉、竹之丸そして西竹之丸に点々と増えていく。山元町から柏葉へ下りるあたり、道路には車馬をさげ、人の往来だけとするため、三本の木杭を立てた。通称「三本杭」といわれていたが、この頃の住宅環境を守る、という先例ともいえる。このあたりは外国人の住宅と日本人の住宅が道路をはさんで、それぞれつづいていて、と地元の人はいふ。震災後、外人住宅が建てられたのにも必然性があつたといえる。

●お不動さま——根岸で白滝不動にたいする村民の信仰が篤いことは、前にも述べたが、大正期に入つても「お不動さま」は、地

元の崇敬が篤いことには変りはなかつた。いま、根岸の人々は、その頃の想い出を持つ人が多い。

毎年一月二十一日頃の大寒になると、不動の堂守が本寺の宝積寺(現、磯子区)の許可を受けて寒行を行った。この白滝不動は宝積寺の境外佛だからであり、許可を受けたのち、白装束姿の行者が、加曾の小字の東、仲東、中村、滝之下を東から順に、朝早くから各家の前に置いてある手桶の水をかぶり、各家の病魔退散を願ひ、祈つて回つた。中には手桶を二つも三つも出して置く家もあつて、より多く靈験をという家もあつたという。行者の修行は真冬の中での厳しい修行であつた。この行は震災までつづいた。

「昔から続いているお不動さまの寒行ですが、最初は五左衛門さんのおばあさん、やいずどんのおばあさん、じんしろうのおばあさんと続き、今は私ども七、八人の人が、お不動さんのお堂で、寒の入りから必ず寒行をしています」(根岸町有志座談会)

根岸の人々にとつて、白滝不動への信仰は、生活にとけ込んでいた。その一例、

「お不動さまには、小字の講とは別に『念佛講』があつて『一千巻』といつていました」(同座談会)

「浜で置一置位もある大亀が上がる(獲る……编者)と、それを大八車に積んで、お不動さまへ運んできて拝んでもらい、亀に酒を飲ませ、甲羅には赤ペンキで上げた日付と場所とを書いて、海



震災後建てられた市営外国人住宅(柏葉方面)

へ放してやりました」(同座談会)

「漁の最中に海のなから水死者が上があると、お不動さまの坊さんに拜んでもらって埋葬し、船を清めてもらおう。そうすると、不思議なことに次の日は必ず大漁なんです。誰もが不漁の日でも、清めてもらった人の船だけは別で、魚の方から網へ自然に入つて来たもんです」(同座談会)

白滝不動の縁日は七月二十八日で、堂では神楽が催され、参道には屋台が並びにぎやかであった。

その縁日も昭和四年、バスが通るようになってからは、道が狭いために廃止になってしまった。しかし、でこぼこ道を通るバスも、結局は九年には廃止となった。

●榊祭——根岸には、この白滝不動と共に、鎮守根岸八幡神社(磯子区西町)があり、この祭礼は毎年八月十五日ときめられている。八幡神社は根岸地域全域の鎮守として、地域の人達にとっては深いつながりを持ちつづけている。

榊の御輿を出す「榊祭」は、ことのほか、地区の連帯と八幡神社への信仰を増幅させたようであった。

榊祭のシンボル榊御輿は、九尺(約二・七メートル)四方、高さもほぼ同じ九尺で、漁師など力のあるベテランが五〇人程でかつぎ、それを交替する者が五〇人ほど二組、都合、三交替の一五〇人もの人を必要とする神輿であった。

一六歳から六〇歳位までの男性が交替に、腰を使って大波のよ

うにゆらし、「あしたはねえど、あしたはねえど」と掛け声をかけながら、加曾、下町、天神橋、木場、根岸橋、坂下橋など町中を、端から端まで担いで歩き、夕方には提灯をつけて八幡神社の南から海へ入り、首の深さまで沖へ出ていく。

この祭を行うための宮番(年番)がきめられ、加曾、芝生、丘、それに堀割の各字が年々交替で担当した。費用は大変なもので、宮番が負担した。費用が工面できないため、「一年待つてくれ」と延ばすこともできた。

榊御輿の榊は、遠く三浦半島方面まで採りに行き、戦後は三溪園からも持つてきた。

榊御輿のほかに、宮番の山車、字ごとの山車四台が出て、榊御輿のあとに続いて練り歩いた。山車は屋台山車で、等身大の神武天皇、神功皇后、加藤清正などの人形が立役となった。その後、御輿をつくる大量な榊が手に入らなくなり、担ぐ人も少なくなつて、昭和二十九年を最後に榊御輿は出なくなつてしまった。

「お祭りは盛大で、東京方面からの参拝者が大勢やってきました。磯野庸幸さんのところの広場には舞台が掛かり、芝居などもやって、すごくたのしいもんでした。だいたい根岸には信心深い方が多かったです」(根岸地区有志座談会)

「八幡さまの榊御輿は盛んなもんでした。それはそれはみごとなものでした。榊は芯の縄を三日位で編み、榊を結えていったものです。作る人は現在もおります。おむすび型に、どちらから見



榊祭——青年たちが化粧し出番を待っている

も三角にむすびながら練り上げるのです。御輿の大きさは時代によって変わり、最後の二十九年には四尺（一・二メートル）四方ぐらいに、ぐんと小さくなつちましたね」（根岸町有志座談会）

「昔は二十貫（七五キロ）もあるドブの板を持ってきて、みこしを担ぐ練習をしていたそうです。そうして練習しておかないと当日は担げなかつたんですよ。担ぐ人は年番から指名されて、準備に二カ月くらいかかりました。祭りは三年に一回だったこともあって、指名された人は必ず出てきました。明治の頃は裸で担ぎましたが、大正になって生活が豊かになり、それと同時に裸がうるさくなつてきましたので、衣類を身につけるようになりました」（同座談会）

「前の日は普段着で担いで、二日目には新しい女の長襦袢を着て担ぐんです。夕方になって提灯をつけて、八幡さまの南から海に入りました。首ぐらいの深さまで海に入ったもんです。海から上ると濡れますから、重さが倍になりましたね、そりやもう重いこと……。櫓は途中で皆むしりとられてしまい、煎じて飲めば病気が治るといわれておりました」（同座談会）

「花場では立ち払いといって、お神酒をいただきました。花場は今でいう祭礼の御酒所です。支度には一週間はたっぷりかかりました。仕事はそっこのけで祭の支度にかかりきりで、そんなことをしても生活は楽にしていけましたね」（同座談会）

今も八月十五日になると、根岸八幡神社にはのぼりが立ち、笛

や太鼓のはやし、境内から門前にかけては出店が出て、人々の参詣でにぎわうが、大波のようにうねる櫓御輿もはや出ることはない。

●雪の火事——明治中期には、外国人遊歩道の一部で滝の景観とともににぎわつた不動下も、大正期には、飲食店などがわずかに並ぶ程度になったといわれている。料理屋の「黄金屋」、「かいどり」、それに坂の上には運送屋の原木などが大きな店であつたという。ほかに坂の下では外国人遊歩道時代の休憩所の流れを汲むというシエクスピア・インという店もできた。ハムとベーコンがうまく評判な店だった、と現在の居留外国人の老人も追憶する。この店のはちにシエクスピアホテルと名前を変えたが、震災前まで繁盛していたという。

外国人とのかかわりは、不動坂に沿って外国人の高級住宅が建てられていったことで、坂を登り切ったところには、赤塗りの門の外人屋敷、その先には神奈川県下の自動車ナンバー一番として、地元では知られていたフレイザという外国人の屋敷だった。

あとのことになるが、このフレイザ邸は、昭和十一年（一九三六）、二月二十六日、あの二・二六事件の起つたその夜、火災に遭つた。「白雪に映える山上の火事は筆舌に尽せない光景であつた。雪のために、消防車は長く勾配の急な不動坂をスリップして登ることはできなかった」（大久保喜八『子どもの頃の人と海』と、地元の人記している）。

また、坂の上には、山岸という人が経営していた不動坂牧場があり、明治十年代から大正期にかけて、乳牛が五〇頭ばかり、牛舎も一七、八棟あったという。

根岸はきわめて地縁的な土地として、人々のくらしがいとなまっていたのであった。

## (2) 復興施設に一役

●受け入れた丘―大正に入ると、港湾貿易の興隆による港湾労働者、港湾関係者の増加にもなつて、今までの居住地中村町や石川町などだけでは土地が足りず、人々は、打越の丘を越えて、山元町商店街の背後に、居住地を求めようになつた。そしてこの受け入れ地は拡がり養沢、西竹之丸の谷戸や丘の中腹にも、住宅が増えはじめていった。

大正九年（一九二〇）四月に埋地に大火が発生した。そして復興は精力的に行われた。市はこれをきっかけとして罹災者のために政府の出資金一〇五万七、五〇〇円をもつて、住宅四九六戸を建設した。中村町（現、南区）神奈川町（現、神奈川区斎藤分町）西戸部町（現、西区）とともに根岸町の柏葉（現、柏葉）が適地とされた。柏葉には五二戸が建てられた。これとともに低所得者や独身者のため、安い家賃で貸与するアパート形式の根岸共同館（五五室）も、あわせて建設された。根岸地区の空地がこうして罹災者のための住宅地として着目され、利用されてふたたび受入

れ地となつた。のちのことになるが震災後、市の住宅施策に当てても同じように収容地となるのであった。

一方、この地区の中心地ともいふべき山元町の震災前について地元の人々は次のように語っている。

「山元町は、日ぜにを稼ぐ人の多い町だったね。三丁目の弁天山には、山崎医院というのがありまして、あたしなんか震災の時、ただで診療してもらいましたよ。たいへん安くて、困っている人にはみんなただで診てくれるんです」（第六地区有志座談会）

「それにね、とにかく山の多い町だから、馬力の運送屋も多かったですよ。石炭とか米、昔のことで氷も運んでいましたね」（同座談会）

●競馬場―根岸は競馬場でその名が知られていた。競馬が開催される日は、根岸の町には、朝から見物する政府高官貴賓たちの馬や馬車であふれ、大変なにぎわいとなつた。町の人たちも柵の外で見物し、子どもたちは木の上に登つて見物したという。

「私も子どもの頃は大正の初めでしたが、春秋の競馬が楽しみで、よく見に行ったもんです。店の主人はもう店をほうりだして、競馬場通いですものね。競馬の日になると、山元町の通りは、ファンがぞろぞろ、人の波で埋まったもんです」（第六地区有志座談会）

町の人々にとって、競馬場はまた、アルバイトの場となつた。「人々の交通整理をやりましてね。これは手間賃がよかつた……」

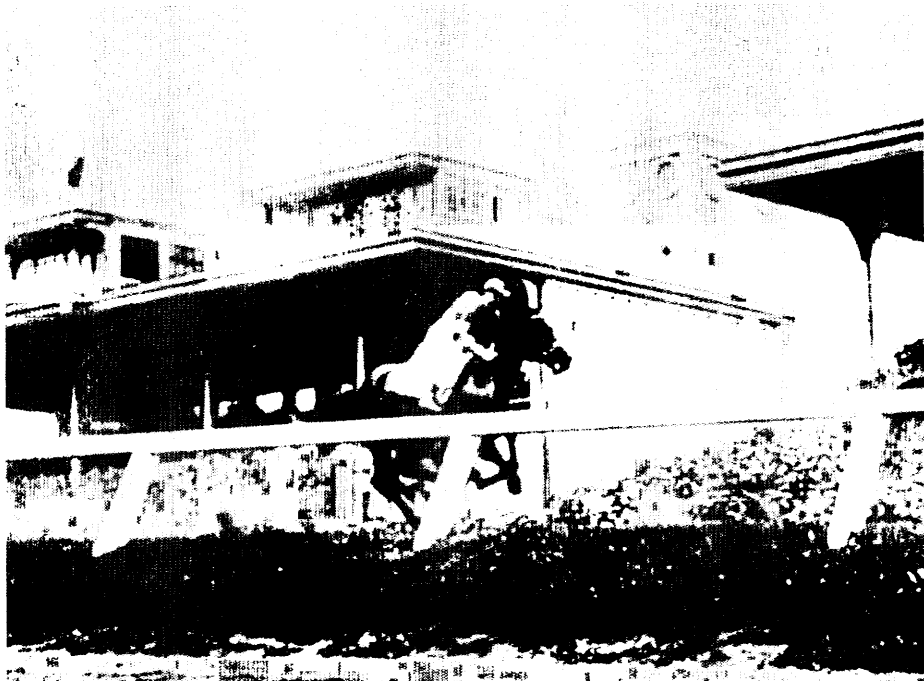
たべもの屋を出すのもよかった。イモでもおでんでも、食べる物ならなんでもよかったですね。道っ端で売るんです。

私なんかもラッパを吹きに行きましたよ。一日一レースあるから一回集合ラッパを吹けばいいわけよ。

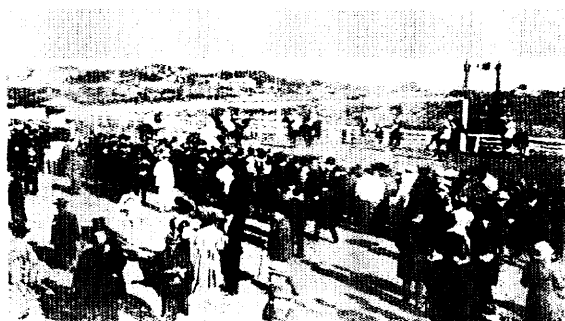
夜になると競馬場は無になっちゃうんで、私ども三、四、五丁目の若い者一五、六人で共陸会（きょうりくかい）という名をつけて、夜警を請負うんです。夕めしたべてから出かけて、朝まで厩舎を見廻るんです。まん中をくりぬいた拍子木でパーチパーチ、たたくとポンとはねる。それでもって回るんです。馬がびっくりするから、厩舎のところだけは叩いてはいけません。一晚そう、二円位だったかな。いい小遣になったもんです」(第六地区有志座談会)

「競馬場の正門から五丁目あたりまで、いまの防衛庁の宿舍がある台地のところへ、地元の仕事師がやぐらを丸太でもって組むんです。そこへゴザを敷いて、五銭位で見物人を入れるんです。場内に入るのには一等席で五円、二等が二円ですもん、一般の人はなかなか入れませんや。子どもや近所の人は、ほとんどここから観たもんです」(同座談会)

●不動坂——けれども、山元町から下の少しはずれた麦田方面も、このにぎわいに影響されたものの、町自体は静けさを残していた。横浜電気鉄道の電車が走るほかは人力車が主で、自動車はほとんど通らなかつた。ただし、山手公園わきの坂道の桜道は依然として、地藏坂と同じように物資輸送の道で、市場に出荷する



根岸の競馬場風景（昭和初期）——スタンドに大勢の人が見物している（横浜市図書館提供）



シルクハットの見物客もいる。

野菜や魚介類の荷車や馬力車の往来がはげしかった。

一方、不動坂の場合、競馬場へ行く人も多かったが、自動車が出現すると、いちはやく自動車に乗っての競馬見物がはじまり、黒い煙をはきながら根岸の町を通り、不動坂をあえぎあえぎのぼるといふ情景がみられるようになった。

不動坂は長く、かなりの急坂なので途中で止まってしまった自動車は、二度三度下から勢いをつけてあがることもあった。

「不動坂は馬力坂ともいって、馬力で登れる坂はこだけでした。でも、馬車にしろ、車にしろ、坂の途中で止って難儀したり、坂の下から勢いをつけてあがらないと、なかなかあがり切れない坂道でしたな。

競馬の開催日には、桜木町の方から本牧経由で競馬場へ行くコースが、自動車の一方通行の道となりました」（根岸町有志座談会）坂に自動車が通りはじめた頃になると、鷺山一帯には、西洋館が点々と建てられた。それが牧場と畑とにマッチして新しい風景を出現させた。

●新風景——童話作家平塚武二は、つぎのように書いた。

「横浜にサギ山という山があります。山といっても、高い山ではありません。昔そのへんにサギがいたのでしょう。こんもりとした丘です。

この丘に、アメリカ人の家や、イギリス人の家や、フランス人の家や、ドイツ人の家や、オランダ人の家や、インド人の家や、

いろいろな外国人の家がいくつも、いくつもたっていました。

今から三十年ばかり前（この物語ができた昭和二十三年から数えて）のことです。外国人が住んでいたペンキぬりの西洋館のことを、異人屋敷などと呼んでいたころの話です。

そのころ、サギ山のふもとに、クンちゃんという子の家がありました。リイちゃんという子の家もありました。ツウタンという子の家やサアホウという子の家や、トコという子の家もありました。

異人屋敷のあったサギ山の上とは別に、サギ山のふもとには、海の岩にカキがくっついていているように、小さな家がたくさんあって、そこにいろいろな子がいたのでした。

貿易の盛んな港として、その頃の横浜は、世界中に知られていました。横浜は、日本人だけの町ではなく、世界中の人たちの町でした。横浜の町のようにするには、横浜でなければ見られないような横浜らしさがありました。サギ山あたりは、丘続きの奥まったところですから、あまり人に知られてはいませんが、横浜らしいところでした」（平塚武二『風と花びら』平塚武二童話全集4）

横浜の作家北林透馬も小説で、この地域を次のように書いた。

「何時も朗らかに太陽の射しある鷺山は、みづみづしい緑の草むらにおほわれて、ペンキ塗の安っぽい西洋館の窓からは、いつも赤い髪と黒い眼の混血少女がのぞいてあます。竹の丸のアーネスト・カアイー・カアイ・ジェの女の子の名が花子であったりしま

す」(北林透馬『街の国際娘』)

しかし、こうした光景も、関東大震災によって大きく変形した。

震災直前のこの地区のうち、麦田、柏葉、鷲山、立野、竹之丸の地域の中心地点は、鉄砲場の平地だった。そこに商店街があり、その他は通勤者の住宅地で約二、二〇〇戸、人口約一万人となった。

●震災——しかし大正十二年(一九二三)九月一日、関東大震災によってその約七〇パーセントは倒壊した。柏葉市営住宅は一〇一戸もつぶれ、十一人が圧死した。根岸共同館も焼失した。千代崎町からの火が麦田に延焼、電車道にそって北側一五〇戸、二八〇世帯を焼失させた。津之国屋材木店では、三万円という大量の材木を仕入れたばかりで、これに火がつき、電車道から南へ延焼しかけたが、地元青年団の必死の消火活動により、あやうく延焼を喰い止めることができた。

さらに山元町周辺には一、八五〇戸があり商店が少なく住宅が多かったが、全壊六〇戸、主な被害は大円寺、円大院、西有寺、江吾田小学校、西竹之丸の幼稚園、競馬場の事務所と観覧席が半壊した。地元での死者は九人だが、よそに出ての死亡、行方不明者は一八五人となった。競馬場が良い避難場所となり、避難者は多いときは一〇万人に達した。

震災後この地区の復興は早く、一年半後には戸数約二、〇〇〇

と、ほぼ震災前の戸数に達したのであった。

加曾、滝之下、芝生、それに西芝生(現、磯子区)方面は七〇〇戸ほどで、ほとんど災害はなく、外人住宅二棟が焼け、白滝不動だけが全壊したのであった。(『横浜市震災誌』)

町の人々は、お不動さまが身代りになったとして、今だに信じて疑っていない。不動堂は大正十四年に再建された。

●あわれ——震災直後のことを、山元町の人々は次のように語る。

「埋地方向、山の向うね。長者町から山田町の方。わたしらが下町って呼んでんだけど、その下町の人たちが子どもをおぶったり、いろんなかっこうして逃げてきたんだ。そしたら、山元町の有志が、今の森林公園のところに避難所を作ったんですよ。それで、震災で逃げてきた人たちがこの辺へ住みついて、随分人口が増えましたね。なにしろこの辺は焼けませんでしたからね」(第六地区有志座談会)

「私が今でも覚えてんのはね。避難民のなかに、死んだ子どもをおぶってる人がいましたね。うちのおやじが、つづらをあげましてね、それでその母親は、狂気のように泣いて喜んでいました。死んだのは知っていても、葬むすう箱もなかった折ですから……」

(同座談会)

震災によって、二階建の一階部分がつぶれて一階建になったり、かしい家はあったが、焼けなかったので、この地に避難し



て来た人が多かった。

「衛生組合の有志が、焼け残った大家に刀や槍を持って、食料を徴発しに行ったんです。で、これを避難民に分けてあげた訳です。あとで一段落してから、この徴発行為が誤解されて、根岸の刑務所に入れられました。幸い、起訴されませんでした。その恩義を感じて、今だにつき合ってる人もいるほどです」(同座談会)

●また受け入れ地——この地区は、こうして罹災者の住宅地となった。住宅地は大正十四年頃にはほぼでき上っていった。そして大正十四年(一九二五)十二月、震災によって神戸や外国に避難したため少なくなってしまう外国人の招致とその保護のために、外人住宅が早くも建てられた。鷺山に四戸、加會上に一戸というようにその数、計一七戸。十五年二月には寺久保に四戸、山手には二三戸(七月から昭和四年四月までの間)がそれぞれ建てられた。

さらに、震災で市内の公衆浴場が激減したので、市は、兵庫県から寄贈されたバラック式の公衆浴場を六カ所、当時の中区内に建設したが、十四年五月には柏葉住宅地内、同年十月には豆口住宅地内にも建設された。

結局、豆口住宅は、十四年十月と十五年一月にそれぞれ竣工、合せて九六戸、柏葉住宅は、十二年四月、十四年五月、同十一月とつぎつぎに建てられ、五一戸に達した。この住宅のほかに北方町字泉には、十四年十月に五戸、本牧町字下里には、十五年九

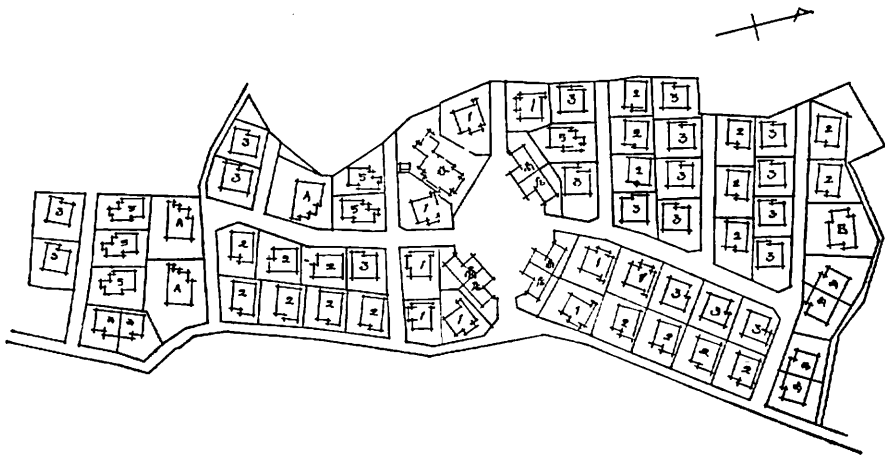
月、二戸がそれぞれ建設された。

●豆口住宅——豆口に建てられた住宅は、当時としてはモダンな建物であった。この時入居した人は次のように語っている。

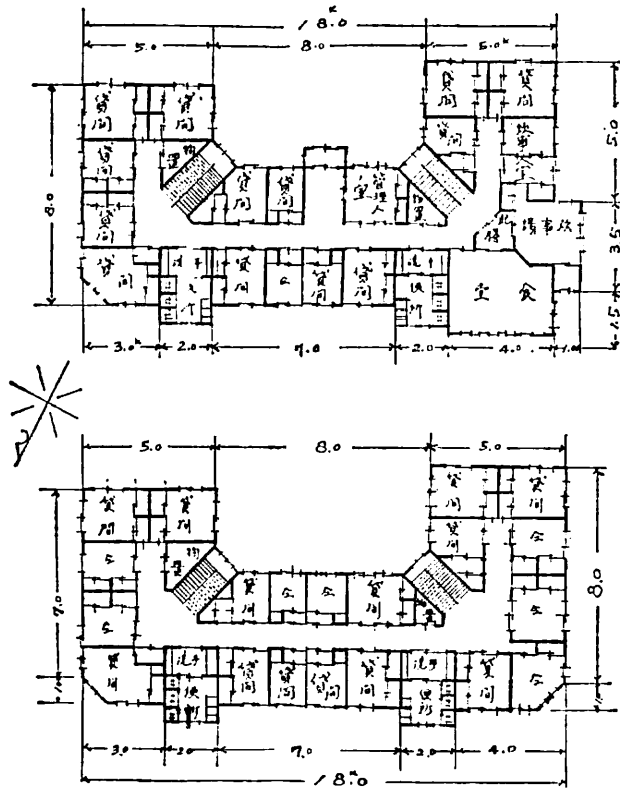
「私どもの入居は九月でした。初め市営豆口住宅といわれており、文化的で大変きれいな住宅でした。屋根はスレート、外壁は板を横に並べたものでした。柱はアメリカからの援助資材で作られておりました。七〇戸ほど建てられ、その中三棟六戸は長屋でした。そのほかは普通の住宅で、それにも三種類があり、少しづつ間取りが違っていました。特号というのが六戸あり、六畳間と風呂とが追加されていました。普通の家には風呂場がありませんでしたので、住宅の中ほどに市営の風呂屋がありました。その風呂がまたモダンなもので、たしか径三間(約五・四メートル)位の円型で、青タイルで張りつめてありました。

商店としては、二棟の長屋に一つずつ、牛乳屋、コロッケ屋、魚屋、煎餅屋、よろず屋(雑貨店)、炭屋などがありました。それにおかず屋というのがあって、煮豆などを売っていましたが、注文を受けるとカレーライスや肉鍋の仕出しまでしてくれるので、それは便利でしたね……」

おもしろいのは、おかずの出前である。今でこそ、すし、そばなどの出前はあたりまえであるが、おかずを近所に届けてくれたのは珍らしいことである。もう一つ「西洋料理」というのがあるが、これは本当の西洋料理であった。ちなみに当時のサラリーマ



横浜市菅豆口住宅配置図



横浜市菅柏葉住宅館平面図



旧、豆口市営住宅管理事務所



旧、豆口市営住宅—旧状を残している

ンや小学生の弁当には、まん中にコロッケが入っていたこともあって、これがかなり「高級」なおかずであったようだ。大正の初期から昭和十年代まで庶民にとって、コロッケは立派な西洋料理であり、食生活にうるおいを与えたものであった。因みに「今日もコロッケ、あすもコロッケ……」という歌が大流行したのは大正七年頃であった。

「住宅の管理は、市の住宅課でした。住宅地内に管理人さんがいて、毎月の家賃はそこへ持って行くのです。特号で三二円から三五円、普通で二〇円から二二円、長屋は二〇円以下だったと思います。米が一升二四四〇銭（一〇キログラム一六四八〇銭）位の頃です」

「住んでいる人は腰弁（当時のサラリーマン）の人が多かったですね。それで、お互いの近所づき合いはよかったですね。新しい文化住宅の村、といったような感じでした。家賃は競争になると、特号が二五円位、普通が一五円ぐらい、だんだん値下げになりました」

「授産所長宅は今でも残っていますが、現在の空地に市営の授産所があり、いろいろな人が内職に通っていました。後に交通局の住宅となりました。市営の外人住宅もその頃出来たもので今も残っています。市営住宅の出来たおかげで、いろいろな催し物がありました」

「いま、豆口児童公園となっている子どもたちの遊び場は、昔の

風呂屋の前で、この広場で素人相撲、祭礼のみこし、よしず張りの生花展、盆踊り、ぼんぼり作り、児童画展、少年野球、小運動会などが催されました。戦争中、風呂屋はこわされて畑となりましたが、現在は豆口台上町内会児童会館が出来ました」（以上、豆口台 福田ユキ氏談）

このように市営豆口住宅は、現在の団地の先がけとして、この地域の大きな変化となっただけでなく、地区の住宅化の契機となっている。いま住宅のほとんどは老朽化はしているものの、現存している。まさに震災後の住宅として、記念碑的存在といえる。

●近代住宅――さらに大正十五年（一九二六）十二月、中村町、久保山、西戸部、斉藤分とともに、根岸町柏葉住宅六六戸が建設された。正金銀行からの寄付金の一部四五万円、政府借入金五〇万円がその資金であった。一かくには前述のように共同浴場が設けられ、その近くには四店ほどの日用雑貨の店があわせ設けられた。

浴場は木造の平家建てで、入浴料は一四歳以上三銭、一三歳以下は二銭、経営は専門の浴場経営者に委託されていた。この住宅の場所は、現在の柏葉公園の位置に当たっている。

根岸共同館も大正十四年五月に再建された。部屋は六畳、八畳を主とする三五室で、一階一三四坪（四四二・八七平方メートル）、二階二二七坪（四一九・七三平方メートル）、管理人室、炊事室、配膳室、食堂があった。この建物はいまでいうアパートで

あつて、近代的な設計だった。

この柏葉住宅はすべて、のちの戦災によってあとかたもなくなくなり、跡地は戦後米軍の接収地となり、解除後は柏葉公園として再生、現在にいたることになる。

●区画整理——震災復興では、麦田町の一部が区画整理の対象地区となり、電車道はほぼ倍に広げられた。さらに、従来のトンネルに並行して、歩道用の第二のトンネルが掘削され、関内方面と本牧、根岸とが緊密に連結できることになった。

●第二トンネル——麦田には、市電の車庫が昭和三年に新設され、本牧、根岸方面の交通の拠点となった。トンネルをぬけた右手に事務所と車庫、そして電車の修理工場もできた。

「震災後、本牧のトンネルを造ろうということで、一番先に桜道の下で麦田トンネルが造られました。桜道はそのトンネルの上にも今でも残っています。トンネルが出来る前は、代官坂や地藏坂を通って関内やザキへ行ったものです。

八百屋でも魚屋でも、仕入れは地藏坂を荷車を引いて行きました。地藏坂の下には押し屋がいて、『今日は二人頼む』とか『三人頼む』とか云って、押ししてもらったものです」(第三地区有志座談会)

「麦田トンネルを掘ることは、山手の商人が一斉に反対しました。物が売れなくなるからといってね」(同座談会)

町の人びとの話によれば、トンネル開通前、本牧方面の物価は

関内方面に比べて高かったという。それは、荷車や馬車によって、山手を苦勞して越して来なければならず、運送賃が多めにかかったからだ、とのことである。

街並みがととのった麦田町は、低地に人家が密集する観があった。

これに対して大和町は、直線道路を中心に市街地化してきて、大きな住宅も見られるようになった。二丁目の竹之丸寄りには、大和屋合資会社と工場があった。この大和屋の跡地は現在、神奈川県住宅供給公社第一共同住宅の位置に当たっている。当時の街並みは現在とほぼ同じような地割であり、なかには庭を比較的広くとった建物も見られた。

### (3) ここも戦時下に

●市電——昭和三年(一九二八)八月、打越の丘が切り開かれ、ゆるい坂を上って、山元町まで市電が延長された。これによって、関外と山元町、さらに根岸町方面へと著しく交通の便がよくなっただけでなく、山元町の商店はにわか潤うようになった。市電敷設の頃について、地元山元町の人々はいう。

「市電を引くとき、地元では競馬場まで持ってきたという希望があつて、そうあつてくれれば重宝だと思つてました。

電車の線路を伸すことで、その時は署名するやらなんやらで、大変でした。賛成の人、反対する人、だいぶもめたんです。それ

つていうのは、店の坪数が向う側もこっち側も少ないんですから、どうしてもそうなるんです」(第六地区有志座談会)

当時の人々が反対したのは、この話にあるように、山元町は、平楽、唐沢の丘陵部南側の細長い形状の土地で、さらに中央部の道に沿った南側はがけ地で、その下は小盆地となっていたため、市電を敷設するには道幅が足りず、敷設は事実上無理であったからである。

「山元町は、市電の終点近くに、人が特別集まるということもありませんでした。けれど奥にたくさんさんの民家があったんで、その人たちの毎日のお惣菜などを売ったので、店はやっていますました。その割には物価が高かったですね。どういわけですかね」(同座談会)

●町の新設―第一章でも述べたが、昭和三年九月一日、町界町名地番整理変更によって、根岸町から大和町(旧字立野・鷲山・竹之丸、立野等)、麦田町(旧字麦田ほか)が分離、独立した。さらに、昭和八年四月一日、次のように分離し、それぞれが町として新設された。この際、多くは旧字名をもって町名とした。(以下カッコ内は旧字名)

寺久保(寺久保、坂ノ台) 塚越(塚越、坂ノ台の一部) 大平町(猿田、上猿田ほか) 箕沢(箕沢、大芝の一部) 大芝台(大芝、塚越の一部) 仲尾台(仲尾) 滝之上(滝ノ上、清水) 根岸加曾台(加曾ノ上) 豆口台(豆口、沢畑) 矢口台(矢口台) 西竹之丸



打越橋から山元町1丁目を見る―昭和3年市電が延長された頃



山元町の終点(昭和四十一年)〈神奈川新聞社提供〉

(西竹ノ丸) 竹之丸(竹ノ丸) 立野(立野) 鷺山(鷺山) 柏葉(柏葉) 根岸台(中丸) 根岸芝生台(芝生台、のちの昭和十五年四月一日廃町、同日根岸旭台と改称)

そして、山元町も従来の一丁目の町域に、相沢などを加えて新しい一丁目とし、相沢、西竹之丸の地域をもって二丁目、江吾田をもって三・四丁目、仲尾をもって五丁目と、それぞれ丁目が新設された。

●根岸の丘——この昭和初期、根岸の丘陵地について、北林透馬も次のように記している。

「競馬場へ行った事のある方は多分御存じでせうが、ヨコハマ根岸の丘陵地帯は、ビロードのやうなみどりの斜面に、赤い屋根と白い壁のバンガロウが玩具のやうに点々と立ちならび、ところどころに小さな牧場などもあって、そのまたずうっと向うには青い海がいつぱいに陽をあびている。一寸南欧風な眺めを持ってゐますが、あや子の家のベランダに立つと、丁度それらが一枚の風景畫のやうに一瞬のうちに見たさされるのです。——此なつかしい眺めは、四年前の時とちつとも變つてゐません」(北林透馬『街の国際娘』)

こうした丘のはずれ加會の上は、南向きで眺望がよくきいた。そこには生糸貿易商の若尾邸が、町域の約三分の一を占める土地に建てられていた。豪壯な邸内には古木が茂り、樹木の奥に洋館、入口には長屋門があり、かつての生糸商の繁栄をしのばせて

いた。これは一例だが、根岸競馬場から南側一帯は次第に別荘地化していったのである。

●街並みその一——昭和十年(一九三五)前後にこの地区の震災復興が成り、現在の原形ともいえる街並みとなった。

資料によれば、トンネルをぬけると麦田町で、そこには、電気局麦田出張所の事務所や車庫が広い面積を占め、引込線が規則正しく五条低ど車庫に入り込んでゐる。

車庫前の市電通りには麦田の商店街がつづき、そのなかに桜湯や藤の湯が目立つ。麦田の上の鷺山や柏葉には、一戸建の外国人住宅が多く、わずかにがけ地や空地が見られる。柏葉の低地、千代崎川の流れに沿う二つの道路が、麦田と山元町を結ぶ。

この柏葉の道沿いには柏葉アパート、柏葉市場などが見られる。道は丘に這うように尾根道となる。尾根道には前に述べた柏葉市営住宅や共同住宅がある。近くには相沢託児所もある。市営住宅の向い側は竹之丸で、横浜訓盲院、そして道すじは矢田牧場である。あたりは空地が多いのが目立つ。丘は西竹之丸へとつづき、まばらな家並みのあいだには根岸会館、愛国社工藤牧場があつて山元町の坂道へとつづく。

一方、麦田商店街の地続きの大和町は、一直線の道に商店が散在して、浴場の稻荷湯もある。ここは昔の鉄砲場を思わせる直線の道で、その中央部には交番、その奥、竹之丸のがけ下には大和屋合資会社の社屋、工場があり、わきには第六天稻荷社が祭られ



田、若尾別邸(昭和五十六年)

ている。近くに大きな大和屋別邸がある。いずれもこの界限では、他に比較にならない大きな建物である。大和屋別邸の隣地は三留義塾で、その向い側は立野小学校のL字型校舎と講堂が仲尾台の丘の下に建てられている。

●街並みその二——仲尾台には数戸の建物があるだけで、外国人墓地が斜面にある。墓地と道をはさんで、市衛生課鉄砲場牛舎があるほか、くぼ地一帯には牛舎が多い。今の山手駅舎あたりは住宅、そのすこし奥は石川牧場である。立野山は、台地の上に、現在の横浜国立大学附属小・中学校の校舎型状と同じ女子師範が広い空間を畑地のなかに占め、山の下は尾越牧場である。

山元町は、この昭和十年頃は完全な市街地で競馬場への道を中心に商店が並び、五丁目の道の両側には住宅が混在している。柏葉方面へぬける低地には長屋が多い。

かつての谷戸田であった大平町、糞沢の低地部分もすでに住宅地が見られ、大平町の入口には地藏王廟や浴場末旅館があり、この辺を基点として商住混在の町がつづいている。

相沢墓地に近くなるにつれて、人家はまばらで、墓域には根岸火葬場と同事務所が目立つ存在である。

同じ谷戸田の糞沢も、山元町の通りから分岐して、すぐ江吾田小学校（現、山元小学校）がある。学校から先の中央部の低地にはまばらに住宅が並んでいる。その裏側、大芝台側のすそ口には岩手牧場、石川牧場の反対側の根岸台、競馬場のすそ、丁度スタ

ンドの裏側に当る地点には、競馬場付属のきゆう舎二五棟の一群がある。その向う側の、塚越、寺久保は、一面の畑で、塚越には根本牧場、寺久保には別な石川牧場が見られるだけである。

競馬場は土手に沿って楕円型に走路がぐるりとまわり、起伏の多い中央部はゴルフのコースに利用されている。

●競馬場廃止——昭和も十年代、やがてぼつ発する日中戦争を目前に、根岸地区の人々の生活も戦時下に組み込まれてゆく。それが端的に表われたのは、十四年、地方競馬が廃止となり競馬場が事実上閉鎖されたことであった。このためそこには、かつてレースで栄光をほしいままにした駿馬しゅんまのいななきも消えた。地方競馬の廃止に替って、十五年二月、鍛練馬競技と称して新たなレースが行われたが、県下では唯ひとつ戸塚競馬場が指定され、根岸は除外された。三月二十一日から四日間競技が行われたが、戸塚には一五万三、八二人のファンが詰めかけた。この競技は、軍馬資源保護法の規則による馬の鍛練が建前だったが、入場料は一円〜三円となつて、五月に入つてもますます盛況で、馬券は二百万円の売り上げとなつた。しかしこのことが、根岸競馬場閉鎖の前兆となつたことを人々は知る由もなかつた。ちょうどこの十五年（一九四〇）四月一日、根岸芝生台、すなわち根岸競馬場そのものの町名が、根岸旭台と変更された。

●定期航空便——こうしたとき、磯子区鳳町には大日本航空によつて南洋への航空基地建設が計画された。地元の根岸や屏風ヶ浦

県立女子師範学校

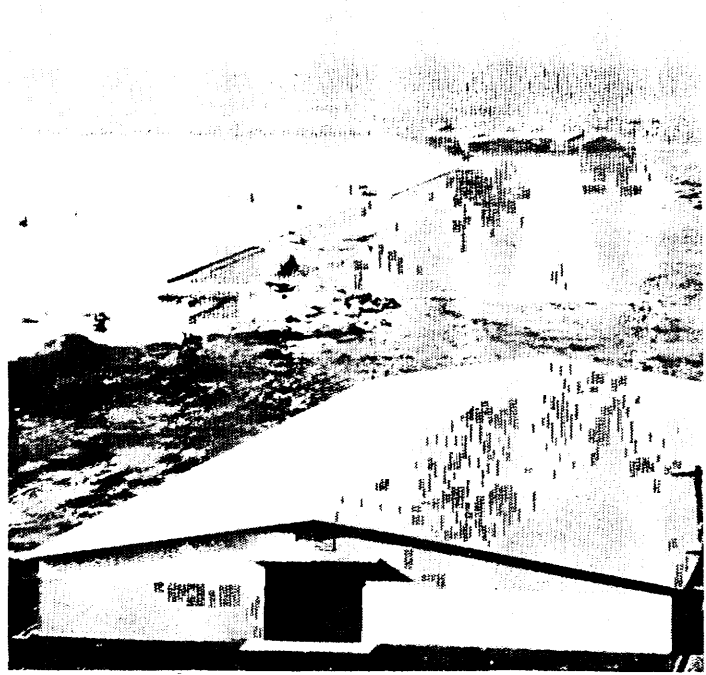


などの七漁業組合が反対したが結局十五年十二月、漁業組合の要求する漁業補償五〇余万円に対して、補償額六万六、六〇〇円をもって、大日本航空との間で問題が解決することになった。十六年四月から終戦の日まで、南洋方面への輸送機や川西式九七飛行艇の基地となった。

●根岸も戦時下——こうしたことは序の口であった。昭和十七年（一九四二）八月、競馬場では焼夷弾を利用した防火実験が行われ、戦時下の重苦しさを見せはじめていた。十八年六月には、この競馬場も正式に閉場され、にぎわいを失った山元町では、この年の夏祭を最後に、三丁目から五丁目までの子ども神輿が金属回収運動に応じて、献納のため市役所にかつぎ込まれた。

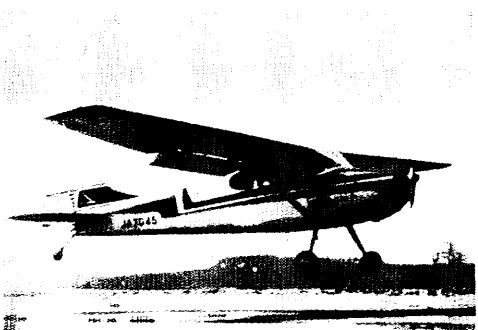
競馬場の施設には、海軍省直轄の軍需工場文寿堂が入って、海軍の印刷を引きうけた。ここでは水でぬれても紙質が変わらない紙に、海軍専用の印刷物を印刷した。（御園御法氏談）文寿堂は明治十三年来馬車道の一角で、日本において元祖といわれる西洋手帳（洋とじの手帳）を製造販売した店であったが、十七年八月には閉店、だがふたたび海軍御用達となり、収用されていた競馬場の建物をもって軍需工場とし、再出発したものであった。

一方、滝之上の元チャータード銀行支店所有建物は、十八年八月健民修練所に指定され、十二月根岸健民修練場と名づけられて開場した。青年の身体の鍛練はすなわち戦力の増強、という思想のもとに生まれたのであった。



根岸の飛行場——右は滑走路、左は海面

●牛もご難——みどりにつつまれた別荘も戦中の施設に収用されたが、この地区で特有のさく乳を中心とする牧場も例外ではなかった。十七、八年には各牧場とも牛の飼料となる豆腐や餡製造から出る粕もなくなり、芋のつるは人間の食料とされていた当時、牛の食糧どころではなくなり、牧場はそれぞれ閉場のうき目



飛び立つ横浜航空のセスナ機——（戦後）〈今村幾太郎氏提供〉

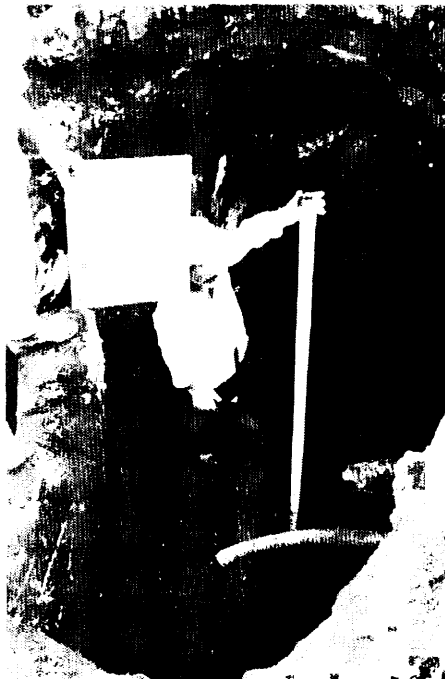




戦争の遺物迫撃砲弾（昭和59年6月）——根岸旭台の住宅の庭から信管がついたままで迫撃砲弾が発掘された、旧日本軍のものであった。



姿を見せた高射砲陣地の発掘現場、一部が露出した



掘り進むと大きい台座が現われた

を見ることとなった。

柏葉の矢田牧場の関係者は、次のように語る。

「昭和十八年頃です。戦争が激しくなったので十数頭の牛を千葉に疎開させました。殺すわけにはゆきませんもの……。牛が居なくなつた牧舎二棟は、軍需工場に転換されました。もちろん、競馬場の文寿堂の工場とは大きさでも比較にもなりません。海軍の将校用の短剣や、陸軍のごぼう剣などの『さや』を作つたんです。敗けたときは、その半製品の『さや』が山のようにした。なんとも言いようがなかつたですね。

あとの話になりますが、終戦後、市内の焼けあとにころがっていたモーターやトランスなどを集めてきて、百人ほどでコイルを

巻き油をさして再生しました。三五、六年まで続きましたかね」  
(大和町 梶原晋氏談)

この牛乳・短剣・トランスの三題噺は手放しに笑えぬことであつた。

軍隊がこの地区にも駐屯。仲尾台(現在の仲尾台中学校地)には高射砲陣地が構築されていた。昭和五十七年(一九八二)五月、仲尾台中学校を増築するに際して、地中から円型の砲座が発掘された。正確なことは不明だが、鉄筋コンクリートの頑丈なものであつた。陣地兵士の宿舍も丘の下にあつた。地元の人にも砲には近寄らせなかつたが、地元の人々と一個小隊ほどの兵士との間では、かなりの交流があつたという。

●建物疎開——山元町一・二丁目では、表通りに面した商店の約二〇棟が戦災の直前、建物強制疎開にされた。

「強制疎開はね、一・二丁目の店全部ですよ。軍隊がきてね。まさかりで、柱でもなんでもたたき割っちゃうんですから、何も残らなかつたものねえ。でもそうされたお陰で、空襲の被害はわりかし少なくて済んだ。なにしろこの土地、狭いでしょ。だからかもしれないがね」(第六地区有志座談会)

その結果、街並みには「昔からの人っていうのも、いま山元町の通りであんまり居ないんですよ。それは疎開しちゃつて、そのまま帰つてこないんです。ですから山元町の昔の市電の終点からズーと奥の方までで、古い店というのは教えるほどで……。一割

かな。焼けトタンのバラックでも、ここにいればなア……。田舎に帰つたらそのままよ……。」(同座談会)

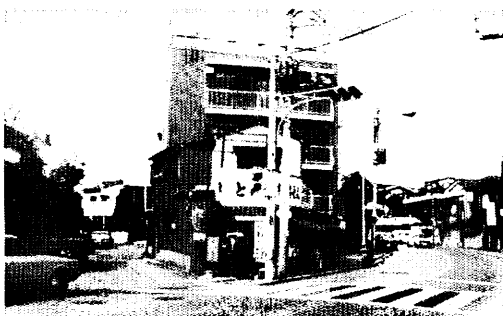
山元町と麦田町をつなぐ柏葉の平坦部には軍用道路がつくられ、麦田のトンネルは、見晴トンネルと同じように、片側が軍用物資の倉庫となつた。

軍用道路は防空防火上の「軍の作戦」というふれ込みで、建物疎開と同じように、軍隊によって有無をいわず住宅はこわされ、直ちに道路が造られ、「それはそれは早かったです」と、当時から住む町の人の話である。町の人々はこれを疎開道路と呼んだ。

●「統制」——そして、この地区の商店や事業所も、戦時下の経済統制のなかであえぐことになる。統制は個人経営の商売の隅々まで及んだ。これはその一例。

「私んところは、大正十五年から『大和町タクシー』というタクシー会社をやつていました。昭和に入ると、そこかしこにタクシー屋がふえてきましたね。今の個人タクシーみたいなもんですが、ずいぶんとはやつたもんです。

太平洋戦争に入つて、ガソリンの統制で個人経営がむつかしくなりましたね。それで有志が集まつて企業合同をしたんです。けれど戦争がはげしくなつたでしょう。盛んな頃の四三台もすぐに減車で四台、それも代燃車になつちまいしました。ただ特別に応急車というのが一台あつて、けが人や病人・産婦人を運ぶために、



柏葉の道——左が在来の道、右が戦時中造成された軍用道路

警察からガソリンの特配を、わずかに受けてましたけれど、それもうとうとう配給ゼロとなつてしまいましたかね」(麦田町 石井正治氏談)

タクシー会社の企業合同は中区の場合、十五年十月現在で、二九業者が山手自動車有限公司(資本金一二万円、小港町三丁目、四一台 運転手二人)と第一タクシー(資本金八万円、本牧一丁目、三一台 一九業者)とに合同している。『横浜市内営業用自動車合同状況』昭十五・十・二十横浜商工会議所調査)

町の人々の記憶によれば戦災前の大和町の、道すじはいまとはとんど変っていないという。

●寺にも墓地にも——こうした町も、空襲によって焼失した。二十年(一九四五)四月十五・六日寺久保が焼失、わずかに外国人住宅一棟(震災後建築されたもの)が残っただけであつた。

麦田の市電車庫は、滝頭・生麦の車庫と同じように、からくも焼失をまぬかれた。空襲の時、麦田トンネルの中や小港の引込線に避難させて、電車一〇台以上が助かった。戦災のあと三、四日目は本牧と横浜駅のメインの通りを市電が走つたのもこのおかげといわれている。

二十年(一九四五)五月二十四日の空襲は、山元町四丁目の一部とそのまわりを焼いた。相沢墓地にも焼夷弾がふり、西有寺は全焼、大円寺は庫裡を失つた。五月二十九日は麦田町、立野、大和町、柏葉、山元町の残り、竹之丸、鷲山それに西竹之丸の一部

がすっかり焼かれてしまった。寺も墓地も容赦なかった。だが根岸町は、奇跡的にこの空襲にも見舞われなかった。それは不幸中の幸であつた。

### 第三節●重ねる変転

#### (1) 終戦の残滓

●接収——戦後の根岸地区は、他の地区と同じように、米軍による接収をうけた。

塚越、寺久保、根岸台(競馬場)の全町域、そして箕沢や大平



麦田の市電車庫(戦後) <川島進氏提供>



埋まっていた50キロ焼夷弾——箕沢82個人住宅の地中5メートルから58年12月、38年ぶりに発掘されたもの、ねじ曲った外郭



同上、信管部分、長さ120センチ、直径6センチ

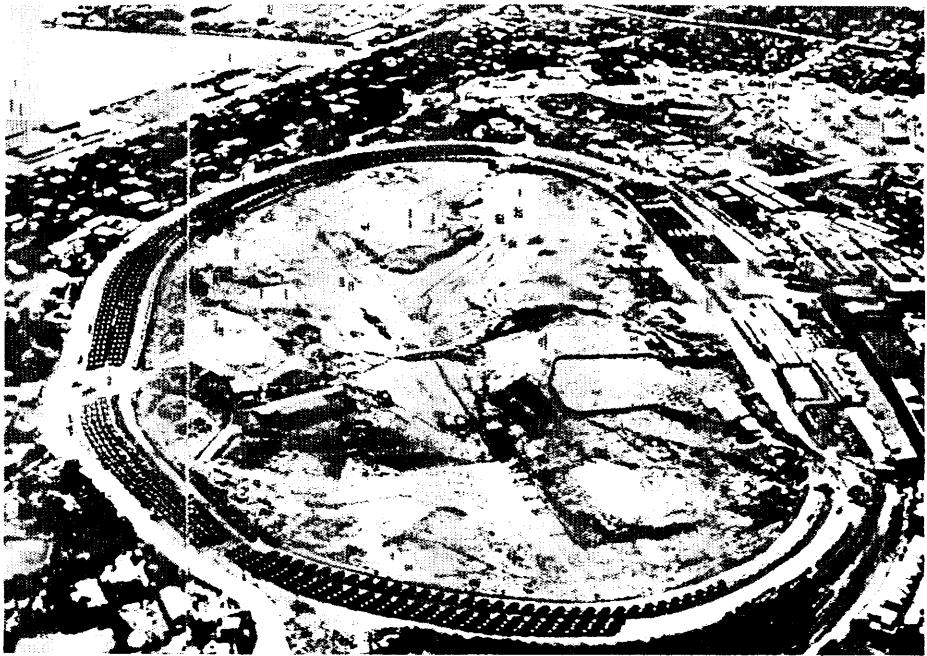
町、竹之丸、鷲山、西竹之丸の各一部の土地と住宅であった。

日当りのよい台地で、ほとんど畑ばかりの塚越、寺久保は、磯子区の馬場や坂下などと一緒に二十一年（一九四六）五月五日に接収され、米軍のブルドーザーで一挙に整地されて、なだらかな起伏を持つ住宅地帯となったのが、今の米軍根岸住宅地である。そして、山元町や根岸台からの狭い道が広がった。面積は四七一ヘクタール、ここには現在、米軍住宅二六二棟が建てられ、横須賀、厚木基地に勤務する米軍軍人、軍属の生活の場となっている。この接収地は、現在にいたっても補償の方向すらつかないまま、住宅が並んでいる。

海軍に収用され、観覧席などを利用した根岸競馬場の軍需工場も接収された。はば一五〇二六・五メートル、全長一、六三五メートルの走路をふくめた土地であった。もとのコースの内側の芝生は九ホールを持つゴルフ場となり、空地は軍用のトラックやジープのモータープールとなった。まさに、兵站基地横浜であった。

走路の外周は住宅、消防所（署）、そしてゴルフクラブ用の建物がたてられた。

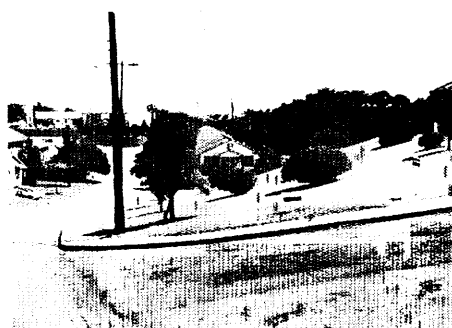
接収は、ここだけに留まらず、従来の外人用住宅のうちの一部、滝之上、旭台では各七戸、根岸町と加曾台で各四戸がそれぞれ接収された。旭台五三番地のシー・マイヤの建物はマッカーサー元帥の宿舎、滝之上一三七番地の平田家は参謀長サザーランド



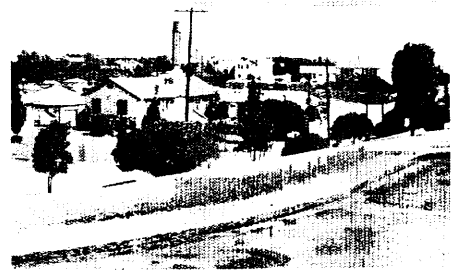
接収された旧根岸競馬場（昭和25年頃）——外周の豆粒のようなものは米軍用車輛，中央部はゴルフ場となった



米軍根岸住宅の入口、立入禁止のポールが置かれている。



米軍根岸住宅——広い庭を持つ木造の住宅(塚越所見)



同上 (寺久保所見)

中将の宿舎にあてられた。いまこれらの接収された外人住宅は、老朽化のため、とりこわされて、跡地にはマンションなどが建てられている。滝之上の若尾別邸もかっこうの接収家屋であったが、これもとりこわされ、分譲宅地となっている。

●「俺によこせ」——接収のときは、米軍そのものではなくて、県の職員が代行したというが、根岸住宅接収にあたり、中には自宅の庭の半分を接収され、庭の真中の金網の向うがすぐ米軍の住宅となり、米軍接収地の立入禁止の看板の下を通りぬけなければ、出入りできない住宅もできた。

寺久保の老婦人はつぎのようにいう。

「はじめに米軍の下士官たちがずかずか家に入ってきましたね。

主人の形見の猟銃や私の丸帯、九谷の茶器などを持っていこうとするんです。ええ、それは有無を言わさずという調子で……。私もくやしから、はじめて英語で、私の娘むこはアメリカ政府の役人よ、無抵抗のシビリアンに一体どうするのさと喰ってかかりました。はじめはドキッとしたようですが、兵隊はニヤリとして、You are Japanese, you must give to me. / お前は日本人じゃあないか、俺によこせなんて、とんでもない。あたりまえです、四十年もハワイに居ても、顔まで向う（アメリカ）の人間になつてませんもの。結局目ぼしいものは全部とられてしまい、あげくの果ては、土地まで接収です。敗けたんだから仕方がないんでしようが、今だにくやしなくて……」（寺久保 三田村千鶴氏談）

この老婦人は、在ハワイ四十年、日本人ドレスメーカーとして草分け的な人。日米開戦により強制送還され、接収にあった一人である。のち「たまたま散歩中のアイケルバーガー中將夫妻と、在米四十年のことから、知己となり、進駐軍將校夫人たちのイブニングドレスを作ったり、將軍のお声がかかりでCIE図書館（当時生糸検査所裏、海員会館）で、昭和二十一年夏には、これらの夫人たちのファッションショーを主宰することになった」（三田村千鶴『在米四〇年の苦汁』）

●パニック——根岸競馬場の接収は地元元山元町にとって、町はじまって以来のパニックとなった。

「山手警察署から各町内に一名ずつ責任者が集まれているんです。行ったらアメリカ軍が接収にくるから、女子どもは外へ出すな、競馬場近くに住んでいる人は疎開しろというんです。そして、根岸競馬場に何百人とかが来る、山手にも平楽にも兵隊が来る、野戦のあらくれの兵隊たちだから暴力行為があるといけない、皆は家の中に入って絶対手出ししてはならないんです。ただし警防団だけは要所要所に警備に立てと。サアその晩みんな炊き出しをして、衣類や食器類のある者は背中に背負い、或る者はリヤカーを引っぱってみんな逃げたんですよ。その人たち、どこへ行ったかねえ」（第六地区有志座談会）

「で、米軍が来たその晩は外へ出なかつたですが、翌日から銃を持って二人ずつ、必ず二人ずつ兵隊が町をグルグルまわって、何かないか、何か変わった物あったら俺の携帯食料とチェンジしろっていうんですよ。時計なんか持っていると、半ば強奪のような恰好で食料とチェンジしてくんです。相手は鉄砲持ってんでしょ。これはもう男でも恐いですよ。だまって家の中に入ってきて、いい着物を強奪されちゃいましたよ。全部……。だからそういう状態の中で、残った人は戦々恐々。とにかく電気も何にもないんだから。当時配給された油を、木綿のボロを芯にして明りにしてたんだが、夜はそれも消して戸を釘付にして寝なけりゃあぶないんだ。一、二カ月して、米軍兵士も精神的に落ち着きが出たのでしょ。今度はガムとかチョコレートをくれるようになりました

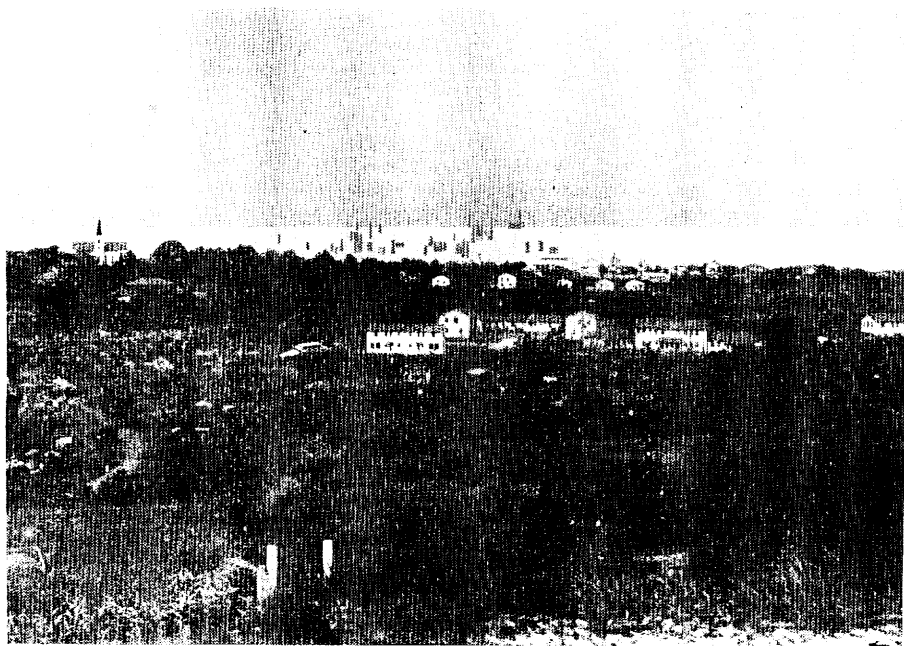
ね」(同座談会)

●米軍ハウス―西竹之丸にも、広い庭をもつ米軍住宅八棟が出現した。現在の六〇番地から六七番地、一二七番地から一三〇番地で、町の人々の住宅に隣り合せてであった。戦前は七戸の農家を中心として、道に沿って工藤牧場、佐久間家の植木畑が目立っていたが、一変してしまった。

「進駐軍がハウスを建てただけで、丘の上の通りだけは大変広くなりました。ハウスには特別に囲いもなく、自由に敷地内に入れましたし、兵隊は別に乱暴することはありませんでした」(西竹之丸 田中滋氏談)

●遺骨―接收をうけた施設のなかには、Y C A Cもあった。もともとここは外国人専用で、例外として日本人の使用が許されていたものだが、戦後は、進駐軍兵士の本格的なスポーツ場として利用された。住民感情としては、戦時中の食糧増産の農園が進駐軍のグラウンドに変身したといったところで、ここだけは「接收」という実感はあまりなかったようである。

しかし、ここには、伝説が関係者によって残された。二十三年十二月、極東国際軍事裁判によって、A級戦犯東条英機大将ほか七人が絞首刑となり、久保山の火葬場でだびにふされ、その遺骨の一部が一時的に、このY C A Cのグラウンドの片隅に埋葬されたという。この頃、駐留軍要員として労務にたずさわった、何人かの証言をまとめるとそうなっているのである。真偽は定かではな



終戦直後の鷲山―中腹の白い壁の建物が米軍住宅 <今村幾太氏提供>



終戦直後の竹之丸——中央の建物は横浜訓育院、左右の白い建物は米軍住宅〈今村幾太氏提供〉

いが、ありえたかもしれないと、町の人もいう。埋葬といえは仲尾台の外人墓地は、朝鮮戦争の戦死者の仮埋葬地となった。

「見渡す限り十字架でした。木の十字架がずうっとね。で私は一時期管理してたんですがね。トラックでもって棺箱に星条旗をかぶせたのが毎日のように来るんです。あとで掘り起こして本国へ埋葬したんです」(山手外人墓地 安藤寅三氏談)

まさにこの地区での戦後であった。

●漁業——昭和二十五年(一九五〇)四月、根岸海岸も飛行場として米軍に接収された。「いままでは、沿岸のすべては砂浜であったが、接収によって、浜も残るところわずかに二・五キロメートルとなってしまった。漁船は砂浜の全沿岸の一带に引揚げているが……家よりの距離が非常に長くなって、経営に支障をきたすことになった」(『神奈川県水産課資料』)ため、漁業活動は不振をまぬがれなかった。

従って、のり干場面積も極度に不足してきた。この海岸線での海苔ひびの面積は接収前の四分の一となり、他は本牧、滝頭、生麦、さらには川崎、大森の場所を借りている状況であった。

海岸は接収され、漁業に不便を感じながらも、根岸町の漁業者は東京湾に出漁してクルマエビ、アナゴ、カレイ、トリガイなどの漁を行っていた。





三十年代の漁業組合員は七三人、役員九人であった。だが接収があたかも前ぶれであったかのように、根岸湾漁業の終末期を迎えていくことになった。

●通行禁止―住宅地域の住宅の接収は、海岸の接収のように、単純に接収地の区画がされるのとは、わけが違って、その住宅に面する道路も接収されてしまうことが多かった。通行禁止措置で、人々はわざわざ目的の場所へ遠まわりをすることになった。例えば、本牧緑ヶ丘あたりの人々は、それまで本牧三之谷方面へ行くのに徒歩で山を越え、一〇分か一五分だったものが、道路接収によって、わざわざ平地に降りて数十分、その上、雨天には市電を利用しなければ、女性などはとていけたものではなかった。

箕沢や大平町の人々が磯子区の方面へいくために、接収住宅地内を通るのにも、その度毎に、入口でいちいち米軍の通行証明書を発行してもらわなければ、通してもらえなかったのであった。

日常生活が不便な町の人々は、たまりかねて中区長へ陳情。二十五年五月七日、中区長は横浜市復興会建設会議事務総長にたいして、区民の立入や通行の自由を図るよう強力に要請したのであった。しかし、その結果は一時通行が許される程度に留まった。

●中将―接収地競馬場周辺の人々はいらう。

「根岸の競馬場が接収されて兵舎が建ちましたが、アイケルバー―中将が来た時、アメリカの残飯を町内会にわけてくれました

た。汚いも何もなく、食べるものがなかったあの時代、大麥助かった思いでした」(第六地区有志座談会)

「中将は近所の人に反感を持たれてはいけないというわけか、商店街に、鶴の一声で歩道を造ってくれました。小学校にはブランコを作ってくれましたね。また町を明るくせねばと、変電所も作ってくれました。実は兵舎に送電するためでしたが、われわれも恩恵を受けたというわけです。現在の山元小学校うらの山手変電所がそれです」(同座談会)

「うちのしまいっ子が四つ位の時、前の道で一人で遊んでたら、アイケルバー―中将の車にはねられたんです、幸いたいしたことはなかったんですが。そしたら、帰りに人をよこして、どんな具合かとお菓子を持って見舞いに来てくれ、それ以来その道を通るたびに家に寄ってくれんですよ。中将が本国へ帰る時も行進の途中なのに何十台もの装甲車をみんな止めて、わざわざ私の家へ入ってきました。そして私はこれから本国へ帰るけど、子どもを大事に育ててくれていいました。とても人情味のある親切な人でびっくりしました。そういう人もいたんですね」(同座談会)

●商店街のはしり―戦後この地区の商店街復興は、比較的早く始まった。二十三年(一九四八)十二月、麦田町の麦田発展会(三〇店)、地つづきの大和町では二十四年六月大和町商栄会(一五六店)、翌二十五年四月には山元町二丁目商栄会(約八〇店)

とつづき、商店街の組織化が行われた。

そしてこれらのブロックをつないで、二十八年十月には山元町一丁目誠商会（約三〇店）、二十九年一月には柏葉銀座柏商店会（二三店）がそれぞれ結成され、山元町から大和町までベルト状に商店街組織がつらなることとなった。これらはいずれも小規模な店がまえて、生活日用品の販売を主としていた。

この頃について、大和町の有志は次のように語っている。

「戦後大和町の商店街を復活しようと、地元の市会議員さんが音頭をとって、二十三年大和町一丁目十一番地、いまのトキワ魚店から二三番地のフロリダまで、マーケットを作りました、三間間口の一二軒ですが、これが商店街復興のもととなりました。その建物はまた二、三店ばかり残っていますが、戦後のものとしてはわりかし丈夫なんですね。売り出したものは、食料品とか衣類、生活必需品でした」（第三地区有志座談会）

「二十四年に商栄会を作りました。なにしろ戦後のことで、町のなかには真つ暗、まず町を明るくすることだ、という訳で、通りのしもたやさんにも入ってもらって、商栄会のほかにネオン会というのを作りました。二三店ほどが加盟しましたね。それで町は明るくなって、立野小学校の方へも店が伸びてゆきましたね」（大和町 守屋銀録氏談）

●戦災者住宅——空襲によって焼失した西竹之丸の済生会神奈川県病院の跡地は、朝鮮会館の寮となり、さらに引揚者住宅に変わ

た。二十八年には県公社住宅六四戸が建設され、勤労者の住宅地へと変貌していった。大平町には同じ二十八年海外引揚者のための「大平住宅」が建設された。さらに、戦災で一時廃校になった立野小学校の校庭には、二十三年四月、四八世帯収容の木造二階建の戦災者住宅二棟、二五七坪（八四九・四平方メートル）、便所棟二棟二八坪が建築された。この建物は昭和三十年六月、元街小学校立野分校（立野小学校の前身）の校舎が落成し、再び教育活動が始められる直前まで、校庭の隅に建てられていた。（大和町 持田巧治氏談より）

これは学校としては迷惑なものであって、当時の小学校関係者はつぎのように語っている。

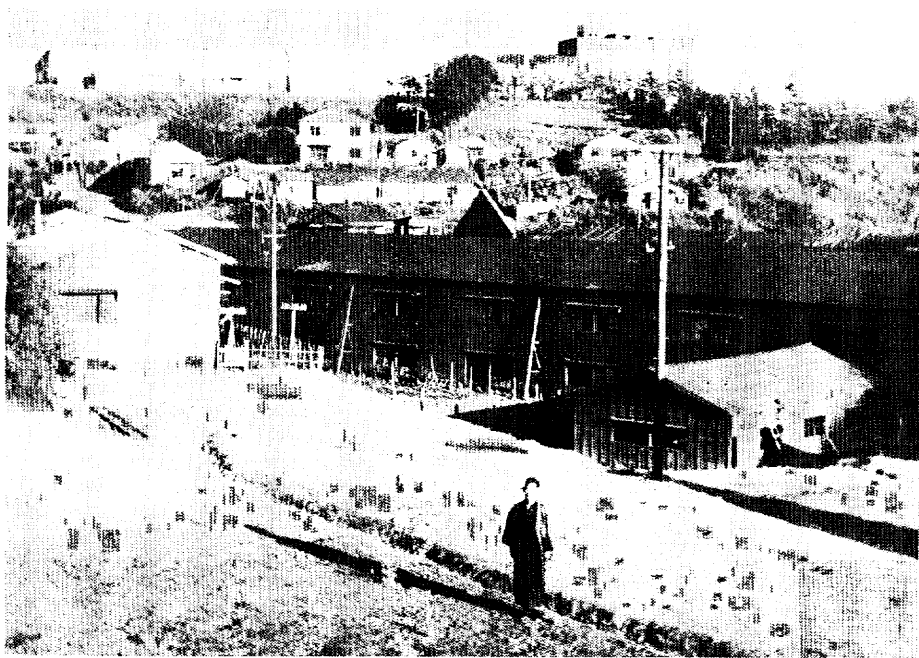
「それはもうお話になりません、ただこの住宅から本校に通学している子どももおりましたから、いたしかゆしで、でも早く撤去をして欲しかったです。校庭には防火用水がありました、そこへ子どもがおち込んで死亡する事故があって以来、柵を設けたり、ひどく気をつかったものです」

この戦災者住宅が撤去されたのは昭和三十年一月のことで、奨学会を中心とした地元の人々の努力によるものであった。

●ネオン——商店街が次第に発生し、商圏が定着化してゆくなかで、そのまわりの地区の賑いが増していった。特に大和町の場合、顕著なものがあった。

二十年春、大和町の入口にあたる麦田町四丁目には、映画館の





立野小学校の校庭にあった戦災者住宅〈持田巧治氏提供〉

金美館が、三十二年三月には三丁目に映画館表座が、さらに、大和町一丁目第六天稻荷前には大井徳三郎一座の芝居小屋が三十四年それぞれオープンし、根岸地区としては唯一の興行街的な地点となった、しかし野毛方面に映画館や劇場ができるようになると、すたれて、四十年夏には金美館、四十二年九月には麦座が廃館、芝居小屋もなくなった。金美館の跡地は、戸塚ストア―大和町店となった。

一方、仲尾台をはじめ、この地区の北部の丘地や谷戸には住宅が少しづつ建ちはじめていった。

「農地改革で地主から土地を安く買いましたが、何しろ食べるものがないので、味噌だ、しょう油だとかで、その土地も手離してしまいました。金持ちがずいぶん没落しましたね」(第三地区有志座談会)

「隣組組織はGHQの指令で解散しましたが、食料配給にはそのまま活躍していましたね。『豆区役所』(中区役所の出張所)も町組織活動の中心となり集会所としてよく利用しました。二丁目八番地、らん美容室の場所がありました。二十五年頃から三十五年頃まででしたね」(同座談会)

三十年八月には、大和町停留所を中心として、電車通りの西側と大和町入口にかけて、山手銀座発展会(三九店)が結成された。トンネルから東の山手一帯を発展させるといふ意思によって命名されたといひ、ネオンも設置された。



金美館のこけら落とし〈桜井宏充氏提供〉

こうして、商店街が組織されてゆくにつれて、周辺に住宅が多くなって根岸はますます住宅化の傾向を見せはじめていた。

## (2) 海なくて

●根岸湾埋立——三十年代に入った根岸には重大な変革のきざしが見えはじめてきた。根岸海岸の埋立、そして国鉄桜木線（根岸線）の開通と国鉄の駅（山手駅）の設置であった。

工業生産の躍進期にあたって、工業誘致策にもとづく工業用地にあてるため、三十一年（一九五六）には根岸湾の大規模な埋立事業の計画が行われた。そのうえ、三十二年四月根岸湾を中心とする国鉄根岸線の建設が決定され、これと相まって、この海面を一大臨海工業地帯として開発することが急務とされた。この地域は、中区と磯子区にまたがり広大であった。三十二年三月根岸・本牧・北方・屏風ヶ浦・富岡・柴など八つの漁業協同組合の漁業者と市との間で根岸湾埋立対策協議会が根岸湾問題協議会に設けられ、漁業補償などが協議された。翌三十四年三月に補償金額六億二千万円で妥結、協定が結ばれた。そして一七七人によってなる協議会は解散した。三月市会では固定資産税免除の条例を可決した。

埋立の対象となった根岸の海は、漁業がいよいよ盛んとなってきつつあるときであった。この頃の根岸漁業組合員数は七三人、役員九人、組合員の八割はのり養殖に従事していた。漁獲高一四

万九、六六七貫目（五六万一、二五一キロ）海苔一七四万七、九八〇枚で、漁獲高は本牧の約七・四パーセント、海苔は本牧の約一二・一パーセントに過ぎなかったとはいえ、この海面にとつてはふつて湧いたことであった。

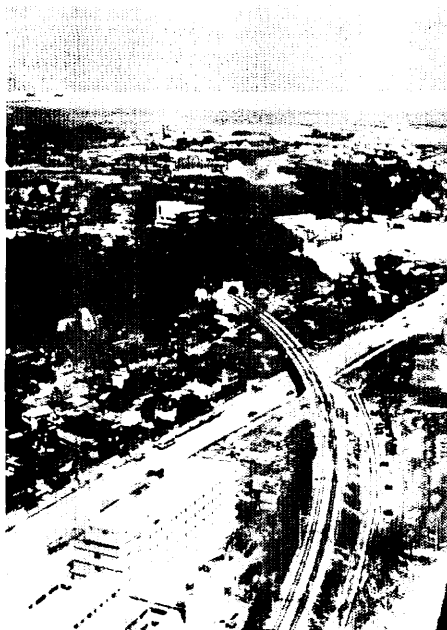
工事は一期、二期に分けられ、曲折のうちに、昭和三十四年二月に着工され、四十六年十一月完工した。

埋立総面積約六〇七万七、〇六〇平方メートル、埋立土量五、一三〇万立方メートル、埋立した土地の高さは横浜港基準面上プラス三・八メートル。護岸延長一万六、一六一メートルにのび、工事費は二五五億円であった。

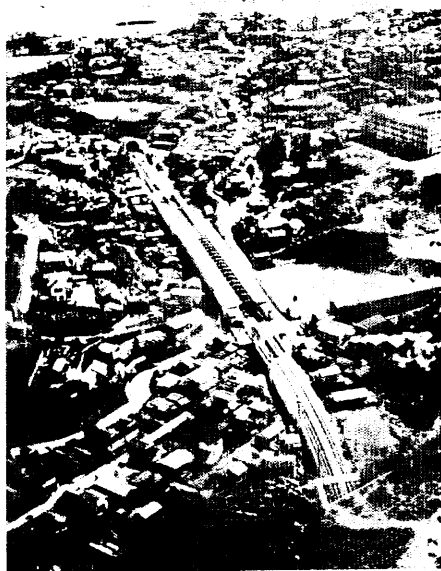
埋立地には、日本石油精製株式会社や、石川島播磨重工業株式会社など、日本有数の企業が進出し大規模な工業地帯となった。石川島播磨重工業は、世界でも最大級のタンカー（東京丸約十五万トン、ユニバース・アイランド三三万トンなど）を進出後建造した。

でき上った埋立地には、新しい町として千鳥町（四十年一月十三日新設）、磯子区の新森町・新磯子町・新中原町・新杉田町などが誕生した。

この間、三十七年（一九六二）一月には、下水処理場の排水が原因で本牧沖の海苔が全滅、十一月には重油によって金沢海岸の海苔も全滅するという被害を受けるなど、工業優先施策が市民生活を破壊するほどの公害問題をひき起した。公害問題調査の学者



トンネルの地点は根岸町1丁目、手前は埋立地、建物は日本赤十字病院〈安藤栄氏提供〉



根岸線開通の頃——中央に山手駅、遠くに根岸湾の埋立地が見える〈安藤栄氏提供〉



工事中の山手駅、まだ丘に住宅もまばらだった〈宮沢一雄氏提供〉

グループの提案に基づき、八月には根岸・本牧地区気象観測が始められ、十一月には公害センターも設置されるに至った。

●石油タンク——日本石油精製株式会社の敷地は、千鳥町の全域一・二七六ヘクタールを占める。五万キロリットルの原油タンク七基を含め大小八五基のタンク、全長五三二・三メートル、幅六・六メートルの原油積み降し用栈橋があり、ここには一五万トンタンカー二隻が同時に接岸できる世界初の栈橋も設けられ、早くも石油コンビナートとなり、広い工場敷地内には巨大な石油タンクが林立した。原油処理能力一日二二万バレルという東洋一の近代設備を誇った。

この製油所では、安全対策に関して点検を行っているが、四十

五年四月、まんいち、石油火災が起つたとしても、根岸町など周辺の住宅地への延焼のおそれはないこと、大型タンカーについても、船内消火設備を増強していることを明らかにした。それにして魚の宝庫であった根岸湾は、こうして消えた。

●宅地化進む——一方、根岸湾の埋立がはじまる頃、加曾台や池袋にも住宅化が進んでいた。三十二年滝之上に私立聖光学院が開校されたが、これが引きがねであるかのように、住宅数は戦前の倍をこし、三十五年には完全な宅地となった。

四十年から四十五年にかけて集合住宅の鉄筋の高層マンションが建ちはじめて、いままでの住宅の光景を一変させていくことになるが、そのマンションや住宅の間には日本石油精製の社宅、横浜電信電話会館などが、土地の条件のよさを買ってか、次々と建設されていった。

住宅化がすすむなかで、かつて外国人住宅として接収された住宅も、四十一年以来、徐々に解除されることになる。根岸旭台においては一時マッカーサーの宿舎となった住宅や滝之上のサザールンドの宿舎がこわされ、その土地は分譲されて、マンションが建てられた。接収解除になった建物で、現存するものは一棟だけで、あとは新しくマンションに変わっている。

このような地区の変化のなかで、丘陵地には次々と住宅が建てられて、一帯は住宅地化してゆく。例えば丘地の箕沢の町内会は、寺久保町内会と連合であったのが、三十一年に分離し独立し

た。その時は一五四世帯であったが、以来、公務員住宅、法務省宿舎、運輸省独身寮、自衛隊官舎などが建てられ、世帯数も二〇〇近くに増加して、横浜の都心部に近隣の、いわばベッドタウン化の現象を見せることとなった。さらに平地の大和町の場合も、もと大和屋別邸跡地に住宅公団によってアパート二棟が建てられ、この地区のビル住宅のはしりとなり、間接的には商店街の景気を刺激することとなった。そして一方では、大和町会館が中心的施設として、地区の活動の拠点となった。因みにこの会館は、もと区役所出張所、通称「豆区役所」の一つであったもので、区内で現存するのはここだけである。

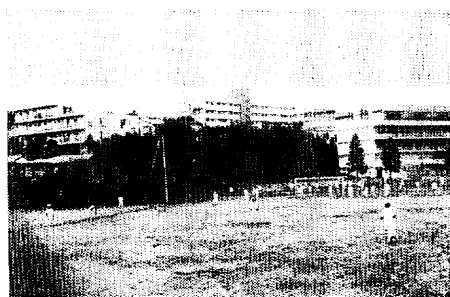
三十八年（一九六三）九月、仲尾台中学校が、旧、高射砲陣地の丘に設置された。

●根岸線開通——昭和三十九年五月十九日、桜木町〜磯子間七八キロメートルの根岸線が開通した。根岸線はこの地区を縦断し、根岸町にぬけてゆく。大部分はトンネルだが、ちょうどその中央部に山手駅が設置された。今までは市電が唯一の交通機関であったが、目の前に国鉄駅が出来たことは、この地区だけでなく、本牧・根岸の地域にとっては大きな変革であった。

駅の設置については、地区の協力によって、一部を除いては順調に進んだ。開設に先だつ三十八年六月三日、隣接の立野小学校が木造校舎改築計画の一環として鉄筋校舎に改築されたが、根岸線からの騒音に対する防音工事が十分考慮された。さらに、駅前



竹之丸あたりも高層化、右下は立野小学校



高層化が進む滝ノ上、右下は聖光学園

整備をかねて、校庭のはしに大規模なよう壁工事が行われた。

しかし周辺の整備が終るなかで、山手駅の駅名が地元では問題となった。開通直前、山手東部町内会は、駅の所在地は立野で山手町ではない、山手に来る人々にとって間違いのものになるとして、陳情書を石田国鉄総裁に提出した。しかし、これはとり上げられなかった。

この山手駅開設は、当然のように大和町の商店街に影響を及ぼすことになった。「うちあたりは駅が出来てマイナスで、昔は豆口の方の人は、うちの前を通っていましたからね」という人もいる。駅の新設によって、住宅の多かった大和町二丁目にも商店ができ、その数は増加して、昭和四十四年五月には山手駅前商和会（五一店舗）が成立、駅の新設にもなって、立野や仲尾台に住宅が少しづつ増加することになった。そして、通勤者などの人の流れが大きく変っていった。

いま山手駅は、広告物を貼らせない珍しい駅として好評である。住宅地のなかの駅としては、ふさわしい存在となっている。さらに、ほとんどの駅の前に無秩序に置かれている自転車群も、ここにはない。これは地区連合町内会の努力によって花壇が造られた結果であった。しかし、この駅前には広場を造る余地がなく、今後の問題として残されている。

四十年代に入って根岸地区は、四十一年六月には、根岸・桜木下水幹線工事が進み、四十八年（一九七三）三月には根岸一・二

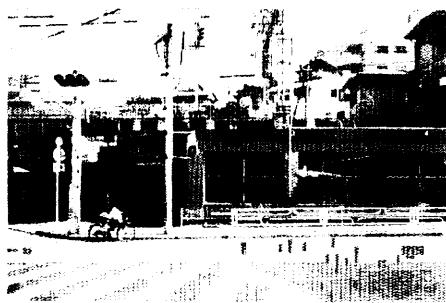
丁目の工事がすすんだが、こうして都市機能の充実が進められ、今まで暗かった根岸町の国道沿いには、一―三丁目の間に三四灯の街路灯を四五二万円をかけて備えたため、町が明るくなった。

●競馬場接収解除―根岸地区にとっては旧競馬場の接収が解除されなければ戦後は終らなかつた。四十四年十一月二十四日、遂に旧根岸競馬場地区のうちスタンド部分と走路の一部を除く一六・五ヘクタールが解除となった。楕円型でもとの走路を含むものであつた。そして地元の人々は解除地を地域のために有効利用することを熱望した。この年十一月十三日、その有効利用の具体的な方策として、みどり豊かな森林の公園を実現するための中区民大会が開催された。

中区民大会は、開港記念会館において、中区内の町内会自治会の主催で、中区連合町内会長進行のもとで行われた。来賓には市内選出国會議員団代表、区内選出県・市會議員団が出席、参加四八〇人で盛会であつた。地元第六地区連合町内会御園会長によって決議文案が朗読され、全員一致で決議された。

その後、旧根岸競馬場の接収解除については、地域住民・経済団体それに行政側はあげて賛同、特に地元の第六地区連合町内会では、伊勢佐木町や横浜駅西口で署名運動を行い、地元単独で四十四年十一月二十八日、陳情を行っている。陳情なきは建設省都市局・大蔵省理財局・関東財務局・防衛施設局であつた。

さらに十一月二十五日前後には、中区内の十一の連合町内会長



山手駅―朝夕は通勤の人々で賑う

とともに、市も陳情を行ったのであった。これはすでに二十四日、防衛施設庁を通して返還された直後の時期をはずさない陳情であった。一方、市は二十日から四日間、国のそれぞれの機関にスタンダードなど残余部分の解除を要請したのであった。

その後跡地をめぐって、ここを災害の広域避難場所に活用したいという市と、競馬発祥の由緒をもって保存したいという中央競馬会との間で、跡地をめぐってはげしい陳情合戦が行われた。その結果大部分は市へ、東北の一角は競馬会へ払下げとなった。

地元第六地区連合町内会では十二月十一日、旧競馬場あとで返還を祝う集いを盛大に催した。

四十五年二月寒風のなかで、市長と市民の会の主催によってタコ揚げ大会がなごやかに行われたが、この時、今までの苦勞が四散したかのように思えたと関係者はいう。

●麦田のトンネル——四十五年（一九七〇）七月一日に市電が廃止されたが、山手の丘を潜る元町と麦田町間の二本のトンネルの利用や処置が地元の大きな課題となった。

二本のトンネルとは、市電のトンネル（第一号トンネル）と震災後の人車専用のトンネル（第二号トンネル）とで、市電廃止後の一号トンネルをどう利用するか、ということであった。市道の幅とトンネルの幅が違っており、今までの市電専用のトンネルをいかに利用するかという点にかかっていた。

本牧方面から市の中心部に通じる市道（二号線）は四車線であ



中区民大会——開港記念会館にて（中区役所提供）



るのに、麦田のトンネルは二車線である。このためトンネルの出入口に当る元町や麦田町では、ひどく車が渋滞していた。上下線で一分間に一八台あまり、一時間で一、〇九四台の通行である。そのほか騒音やトンネル内での事故防止対策など、地元から諸問題が提起されていた。

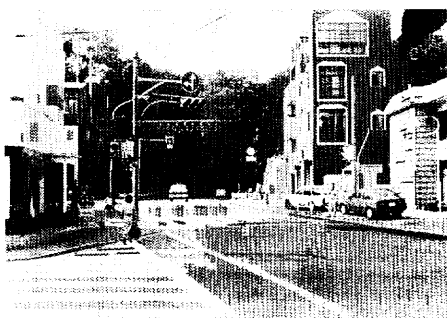
そこで市では、市電用のトンネルを、下り専用の二車線の自動車専用の道路として使用することに決定し、四十七年十二月、三井建設株式会社と工事契約を結び、二億九、七〇〇万円をもって改良工事が開始されることになった。

中区議員団は、地元で工事内容等の説明会を行った。しかし地元側では歩道専用にしたとの強い要望を出し、一、七〇〇余人の署名を得て、市長及び市議会議長あての陳情書を提出した。市は地元の要望もあって、排気ガスの測定を、四十八年五月九日から七日間、トンネル中央部、元町側出口などで実施したが、麦田側では、四日間平均値（五時間測定）が七・八PPMで最高が二二PPMという結果となり、第二トンネルを一方通行、車道専用にしても、排気ガスによる公害は発生しないことが確認された。

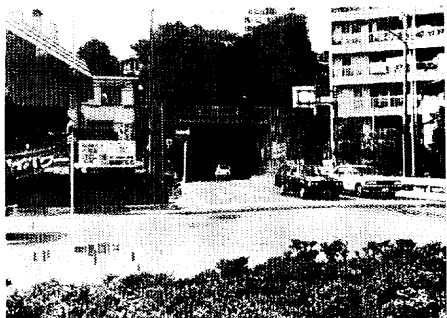
四十八年（一九七三）十二月の市議会において、地元の陳情書について審議を重ねた結果、それを却下し、当初の計画通り、車道二車線と一・五メートルの歩道を設置することに決定した。工事は四十八年十二月二十七日から開始され、トンネルの全長二七六・四メートルにわたって、幅員六メートルが八・二五メートル

に拡張された。騒音防止のためには、トンネルの内装として三メートルの高さで、ガラス・ウールのつまった舟型のスレートをはめ込む工法を実施し、出入口から五〇メートルの上部には、W型の吸音体を取り付けた。また地質を改良するために、地盤凝固剤を注入し、鋼板を横打ちにするメルセッル工法もとられた。さらに付近の環境保存のために、陸橋を改修し、交差点には芝生や低木を植えて、環境の浄化を図ったのであった。

工事中の四十九年七月十三日に、元町側に放置してあった、全長二・六メートル、重さ二トンのコンプレッサの下敷になつて、五歳になる幼稚園児が死亡するといういたましい事故も起つたが、五十一年八月二十日に開通することになった。



麦田トンネル



麦田第2トンネル

●公園オープン間近か——旧状が少しずつ変わってゆくなかで、四十七年（一九七二）二月、根岸競馬場跡地が広域避難場所と定められた。この旧競馬場跡地は、住民の希望が実ったものであった。三月、空きカンやゴミが散乱していた草原を整備した。整備の途中には四十八年一月に二回目のタコ揚げ大会も行われ、森林公園のオープンは間近であった。

一方、柏葉市営住宅のあった場所も接收されていたが、おくればせながら四十七年二月九日には解除、三月には市に返還されていた。この土地についても地元は地域のための有効利用を要望、その結果、四十九年末、今までの古木を残し、四、〇〇〇万円をもって約八、九二三・五平方メートルの柏葉公園として整備され、五十一年三月に完成した。

●国際親善盆踊大会——この地区が、古い町の形状を残す根岸町を中心としているながらも、矢口地区は対照的に、きわめて国際的な色合いが深い。矢口台の望洋自治会は、昭和五十一年から夏の盆踊り大会を、YCAC(Yokohama Country and Athletic Club)の広場を借りて行うこととした。数日のことではあったが、地元の人々の入場が許されたのは、初めてのことであった。青い眼の子どもたちが浴衣にハッピーではしゃぎ、外国人の大人たちも盆おどりの輪にとけ込んだ。

「私どもの望洋自治会（矢口台、池袋、根岸、加曾台の各町合同）では、国際親善盆踊り大会を五十二年から始め、四年目の夏を迎



タコ揚げ大会——旧競馬場あとにて（昭和45年）

えました。私どもの地域は古くから外人さんの多い土地で、閑静な住宅地です。外国人が多い中区の特殊性を生かした国際親善盆踊り大会は、わたしどもにとって手近で、レジャーが満喫できる点で大変うれしいことです。

言葉や風習も違う外国にももちろん祭りはあるでしょうが、日本の良さと伝統を理解してもらえれば、すばらしい催しであると思います」(矢口台 伊屯彦松氏談)

こうした、地元的外国人とのかかわりは、この矢口台で年毎に盛んになっている。

### (3) 残る古さ

●都市施設の完成―昭和五十年代に入ったこの地区には、都市施設として重要なものがいくつかの完成した。

五十一年二月柏葉公園が完成した。約二、七〇〇坪、工事費四千万円、今までの古木をそのまま残し、そのほかにサクラを植えた。遊具のほかに自由広場が設けられ、地元の五カ町で日常の管理を行うこととなった。

八月二十日、永いあいだ問題となっていた山手の第二トンネルが開通した。前述のように麦田トンネルは、その前後の市道が上・下合せて四車線にもかかわらず、このトンネルは二車線と狭く、慢性的な自動車の渋滞がつづいていたもので、この解消が目的であった。

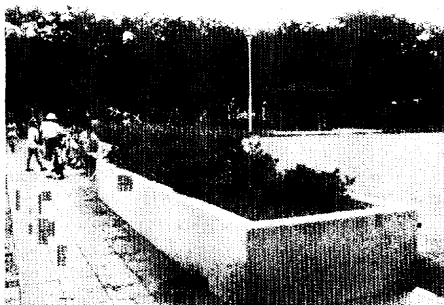
●森林公園―五十二年(一九七七)十月一日区民待望の根岸森林公園が完成開園した。面積二八・四ヘクタール、四十四年十一月に接収解除され、四十八年二月には公園用地として市に無償貸与され、四十七年度から五カ年計画で整備が行われてきたもので、約三億一、〇〇〇万円の費用を要した。

植栽された樹木約四、七〇〇本。株物一八、〇〇〇。新らしく造られた施設は入口広場、駐車場、管理棟、照明(三〇〇W水銀灯二三基)、放送設備などであった。

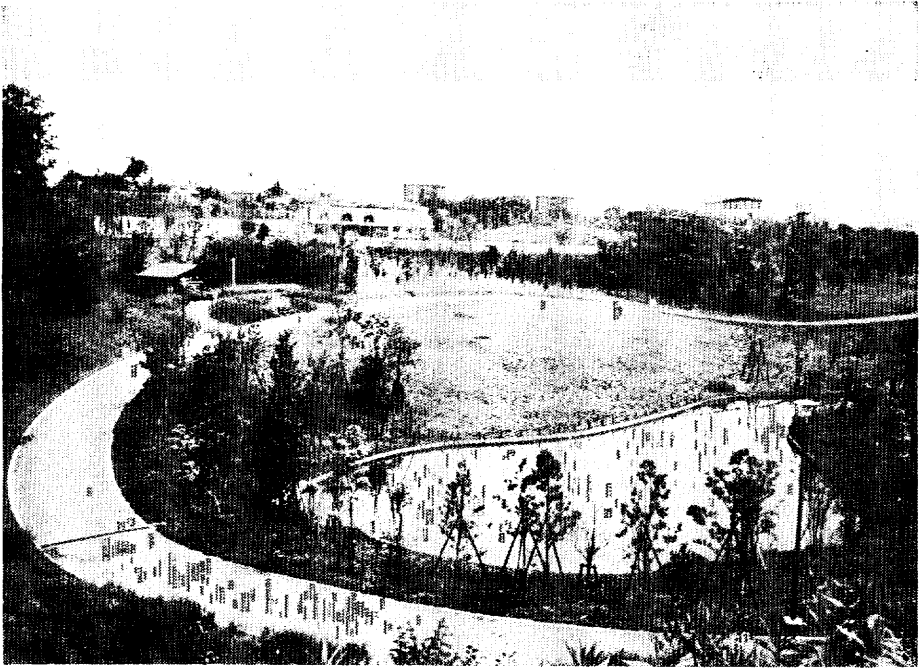
公園は自然地形を充分に生かした上、芝生地と樹林地とを設け、四十九年十二月十九日には、長野県飯山市からブナー一本、モミ二本、ユキツバキ一本の寄贈を受けて、春日飯山市長が飛鳥田市長とともに記念植樹を行った。

●馬事公苑―また五十二年十二月二日には日本中央競馬会によって、二・四ヘクタールの根岸競馬記念公苑がオープン、施設は人工の滝をはさんで、東側にはポニーのきゅう舎、放牧場などが設けられた。

根岸競馬記念公苑のなかには、わが国最初の馬の博物館が落成した。白いスマートな建物で建物のまわりにはシンザンや幻の名馬トキノミノルの銅像、内部の壁面には歴代のダービー馬のパネルなど、馬に関する資料が豊富にととのえられた。同年七月ポニー放牧場にはカナダから輸入したウエリッシュポニーの茶と黒との各一頭、それに札幌生れでイギリス原産シェットランドポニー



柏葉公園



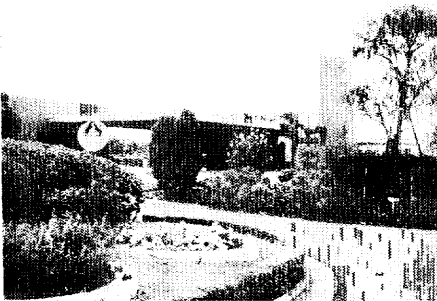
造成直後の根岸森林公園

の一端を加えて、三頭が放牧された。いまポニー六頭にふえ牧場は家族連れに人気がある。園内は回遊式でベンチも置かれており、中央部は緑地である。

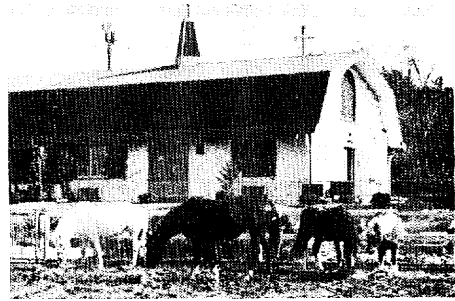
●アンデスの響き―さらにこの年の八月十三日、空地となっていた麦田の市電車庫跡が、麦田老人スポーツガーデン（面積二、九四八平方メートル）としてお目見得し、老人のスポーツ広場としてゲートボールが行われ、いまにつづいている。コブシが老人会と地元町内会の間で植樹され、ツツジやサツキも植えられた。老人たちのスポーツ利用施設としては横浜市で最初の施設であり、運営は中区老人クラブ連合会と地元町内会により行なわれている。

また、五十二年九月、全市の老人のための地域福祉委員会が設けられ、大和町立野町内会でも公衆浴場いなり湯を会場として交流会がつづけられていたが、五十六年十月十五日、浴場経営者の努力で、折から訪日中の南米ポリビアの民族楽器チャランゴの世界的演奏家、エルネスト・カプールの来町が得られ、いなり湯で演奏会が行われた。新聞は「アンデスの響きハママの銭湯へ」（『神奈川新聞』昭五十六・九・十）と報じ、大評判となった。

五十三年一月、箕沢寺久保町内会では、日米親善子どものもちつき大会が開かれた。参加したのは同町内会の子ども一五〇人と、競馬場あとの米海軍横須賀基地横浜分遣隊根岸ハイツのアメリカン・バードスクール（小学校一〜三年生を収容）の子ども二



根岸競馬場記念馬事公苑



ポニー牧場



アンデスのひびきを楽しむ町の人々、大和町いなり湯にて〈松山秀雄氏提供〉

○人である。

この親善目的は、双方の子どもたちが、石を投げあいガラスを割るやら、いたずらして困るので、これらのごたごたを防いで、子ども同志の友好を深めようとするのが狙いであった。前述の望洋自治会の盆おどりといひ、このもちつき大会といひ、いかにもこの地区らしい国際交流である。

● 築井戸稲荷——根岸地区は古い町だが、幸いにも震災と戦災ではそれほど災害を受けなかった。それで旧跡もまた残されている。

すでに述べた白滝不動などは別として、旧跡の多くは町のかたすみにかきかたあつて、昔を偲ばせてくれる。豆口の入口、道わきにこんもりとした森につつまれて、清水寺と稲荷神社が併祀されている。通称、築井戸稲荷といわれている。ここは根岸町新井家一族の氏神であり、今も一族によって祀られている。根岸町の新井家に伝わる古文書によると、「先祖彦左衛門は、永正十三年（一一五〇）七月十一日、相州三浦新井城が没落したのを期に、十七人で根岸の築井戸に逃れて来た。この地で十七人は農業を営み稲荷の宮を建て、築井戸と名づけた」とある。

この境内地には、天保二年の年号の入った水盤、大正十一年十一月の稲荷出現記念碑、震災供養塔、昭和七年十一月の築井戸稲荷四百年記念碑などがある。

根岸の新井一族は、毎年二月の初午の次の日曜日にこの寺と神



カブール〈松山秀雄氏提供〉

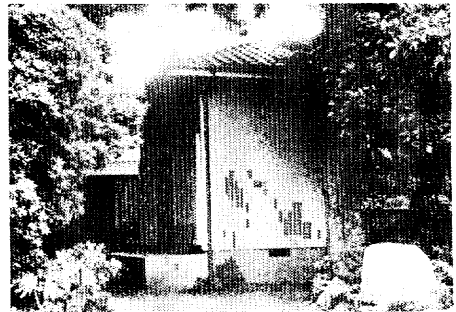
奈川県三浦新井城跡において供養をいまだに営んでいる。五十八年七月には、新井城主三浦氏の後裔と交流が行われた。

●天王社——山元町二丁目、町内会館をかねた老人クラブの集会所港陵館の建物の正面奥には、天王社が祀られている。昭和初期十二年まで八月の三日間、五〇をこえる夜店が出て、一六地藏(伊勢佐木町)・水天宮(長者町)とともに、三大縁日といわれていた地元での唯一の祠である。祭壇わきの由来書きには、昔、権現山といわれてさびしい村落であった頃、一帯に悪疫がはやり住民は大いに苦しんだが、当時この付近を治めていた大久保氏が、病魔退散、郷土繁栄を祈願したところ、二柱の神が現われ「われは牛頭天王なり、われを祭らば悪疫退散、幸を増し永く郷土を栄えしめん」と告げたので天王社を祭ったところ、たちまち靈験あらわになったとある。以来、大久保氏の守護として山元町に祭ったという。

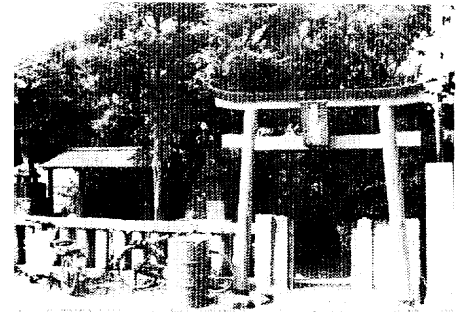
●第六天稻荷社——大和町一丁目には、第六天稻荷社がある。地元の人はいう。

「六天稻荷は社格がある六天様と社格のない伏見稻荷とを合せ祭ったもので、神楽殿までありました。二の午の日が祭りでにぎわったものです。この周辺は威勢がよくて、質屋、酒屋など商店が多く並んでいました」

この六天稻荷社は、震災後、大和屋工場の敷地に移され、戦後、再び現在地に帰って来たものである。その間、社地には衛生



築井戸稲荷(本堂)(豆口台)



第六天稻荷社(大和町)

組合事務所、後に町内会館が造られた。戦後、鳶職熊王茂さんと善行寺の住職とが、この社地で白狐を見たということから、稲荷もこの地に帰りたいとの願望であろうと推測、現在の土地に移したという。この第六天稻荷には、「大和屋シャツ合名会社有志」奉納の石灯籠一对(年号不明)三十五年七月「目黒繁蔵、福島平助、粕川與平、鳶 熊王」と連名の手洗盤一基、三十六年二月「野州足利町川島久兵衛」と刻銘のある石灯籠、さらに昭和四年、粕川與平狐像一对、同四十八年九月、大和町立野町内会の奉納した鳥居などがある。

このうち、野州の川島とは大和屋の生地を取引先、手洗盤は大和屋出入りの鳶、骨屋、ペンキ屋、建具屋の寄進である。なお、

社殿正面に「津久新」とある一対の天水桶がある。これには、「安政六己未初秋□□□増田金太郎」とあるが、これは太平洋戦争中に関内から持ってきたものといわれている。

いまもこの稻荷社は地元大和屋とゆかり深く、町のシンボリック存在ともなっている。

●小祠―根岸町には町なかの小祠が多く、町の古さが感じられる。

根岸町一丁目には王子権現社がある。古くから航海の安全と豊漁の神で、海から戻った漁師は大魚を奉納してお礼をするのがなわらわしであった。震災前は、社の前や一帯が竹やぶにつつまれたおだやかな社であったという。

二丁目には「おしゃもじさま」といわれる社宮司稻荷がある。子どもの夜泣きとか百日ぜきに霊現あらたかといわれ、この社からおしゃもじを借りて、子どもの顔をなでると治ったという。治ると新しいおしゃもじに子どもの名前を書いて、借りたおしゃもじと一緒に納めたという。この社の側には加曾の大楠という名木があった。土地の人はいう。「昔はしゃむしゃと言ったもんです。たくさんしゃもじが供えられていました。境内には三浦の落武者が植えたという玉楠の木が二本あって、木はほら穴になってました。子どもの頃、木に登ったりほら穴に入ったりしてよく遊びました」とは七〇代の土地の人々の話である。

二丁目にはほかに加曾坂に御嶽社があり、これは九尺（二・七

メートル）四方の社殿で古くからの御嶽講の人々の信仰を集めてきたという。三丁目磯子区境には諏訪明神跡がある。諏訪明神は戦後に廃絶され、石段だけが残る。諏訪神社のお祭りには、里イモの葉っぱに赤飯をのせて、子どもたちに配られたものです」とこの頃をなつかしみ土地の人々はいう。王子権現、社宮司稻荷、諏訪明神については『新編武蔵風土記稿』に記載されている。

●新旧―古き時代を表わすものとして、この地区には、茅葺屋根建物と旧状を残す外国人住宅とがある。矢口台、Y C A Cの下、少しばかり残った畑のかたすみに、農家造の民家が現存し、かつての中区内の農家のおもかげを伝えている。「今から二百年位前、根岸から移築してきたものだといわれています。今時、茅葺ではし



王子権現（根岸町1丁目19番地所在）



御嶽社（根岸町2丁目112番地地先）

社宮司稻荷社（おしゃもじ様）（根岸町2丁目46番地先）



矢口台のカヤ葺屋根建物

ようがありません。第一、屋根に葺くカヤもありませんし、葺く人もいませんしね」とこの家の所有者大河原さんは言う。台所の一部、風呂場が改築されているが、そのほかは純然たる農家造である。大黒柱や建具はすすけて黒光りがしている。土壁には小さな神棚があり、その中には掌に乗るような小さなエビスサマが祭つてある。これと対照的に、同じ矢口台に外国人の古い住宅がある。その住宅はかなり老朽化してはいるものの、しっかりとした構造材で、いまだに人が住んでいる。窓には鋸戸、ダンスができる十二畳ほどの板の間ホールもある。いく度か内外部ともに補修されているが、屋根は亜鉛葺鉄板、外壁はいわゆるナンキン下見、内壁は板壁を主として、床はフローリング張り、外人住宅の模様を伝えている。

◎馬頭観音——このほか根岸地区の古さを残すものは、根岸共葬墓地の墓碑や地藏王廟など、さまざま見られるが、競馬場にはスタンドそのもののほか、一基の石碑にそれを見る。簀沢のマンション、パークサイドのうしろの三角地、かつてのコースの第四コーナーの所に馬頭観世音の碑がある。この碑は、国際的レースで鳴らした競馬場の華やかな陰に、犠牲となった競走馬の霊をなくさめようと、明治三十三年に東京、横浜の競馬関係者の寄付金によつて建立されたものである。しかし接収されてからは草むらにうもれてしまい、ゴミ捨場になってしまった。これを元騎手の吉田慶太郎氏が見つつけ、市と中央競馬会との協力を得て再建、礎石



馬頭観音



矢口台の外国人住宅



と鉄のかこいをつくり、三十五年ぶりの五十二年十月二日に、馬事公苑のオープンに加えこの年が午年であったことから馬頭観世音祭が行われた。吉田氏はつぎのように語っている。

「私も昔は根岸で、スワンとかヤハズという馬に乗って勝ったこともありません。戦後故郷の北海道に帰りましたが、なんとしても根岸がなつかしくて、二十五年にもどってきました。しかし馬頭観世音さまは、草むらのなかにころがっていません。あまりにひどい。かつて、根岸で競馬をさせてもらった者として申訳がないです。せめて掃除の一つなりをさせてもらってお世話しなければ。それが残り少ない人生の私の務めじゃないかって思えたんです」

それから、草刈り、掃除、線香や花を供える日課が始まった。競馬と共に八十歳すぎた氏は、いま町の人たちからは、馬頭さんの吉田さんと呼ばれている。

●中層住宅―現在の根岸町周辺各町には、中層住宅化が進んでいる。根岸町と矢口台、豆口台の入口に当る地域には、関東財務局本牧住宅の五階建が五棟、三階建一棟が目立ち、さらにその奥には郵政省宿舍、三階建二棟が建てられている。この地域には崖地が多く、港南病院のうしろには、自然林がわずかながら残されているものの、早晚こも崖地の利用が図られ、住宅地に変わっていく筈である。

根岸町の北側の丘陵地は、根岸加會台、滝之上、根岸旭台へと

続く。加會台には、日本石油根岸寮アパートが六棟、いずれも四階建である。加會台は見晴しのよい丘地で、そこには集会施設の横浜電信電話会館がある。隣接する旧若尾邸の敷地一万三、二〇五平方メートルは開発されて瀟洒な分譲住宅三二棟が住宅地区を形成している。この丘も崖地が多いので自然林が保たれている。

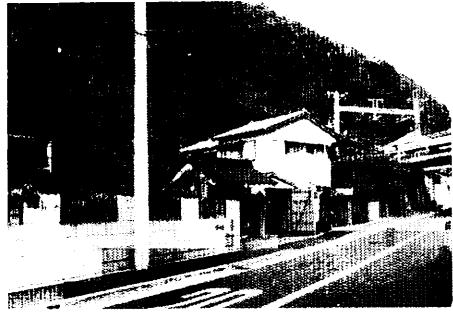
滝之上は、その名の示す通り白滝不動尊の上、丘の台地であり、根岸森林公園前の道路までが町域となっている。滝之上には聖光学院の高等学校・中学校があつて、そのグラウンドと共に広い空間となっている。森林公園のまわりの道に沿って、カトリックキリスト教育修士会や、さゆり幼稚園の建物が森林公園のみどりに映える。道筋には、昭和三十四年二月竣工の日本住宅公団滝之上団地の四棟（四階建二棟、五階建二棟）のほか、三階建一棟、四階建三棟のマンションなどが次々と建設されている。

不動坂は大きくカーブして森林公園に達するが、カーブの先端に五階建のマンション四棟、坂をのぼりつめた森林公園わきは根岸旭台で、そこに高きで目立つマンション分譲住宅地がある。根岸加會台にはノルウェー大使官邸があり、付近には一二戸の外人住宅があつて、滝之上は外人住宅が集中している地点である。

●古い街並み―根岸町はまた古い街並みを残している数少ない地域である。根岸町の入口、一丁目の角地には料亭根岸園、そこから旧道が西に伸び、その上を根岸線がななめに走る。旧道は根

岸旭台や磯子区東町に至るが、道に沿って住宅、それも旧家が多く、若干の商店がある。この町は震災と戦災に残った家が多かったが、少しずつ建替えられている。白滝不動尊（宝光寺）の滝の水の落下量はわずかであるが、区内ただ一つの滝として、こんもりとした丘の緑に映えて景観をなしている。境内には、青面金剛神、庚申塚などの碑が青苔に埋まっている。不動の参道の入口には、小さい建物ながら常に地域の人々が集る、地域コミュニティのための町内会館がある。

町内会館から南側の道は主要地方道でかつての海岸線に沿った道路である。



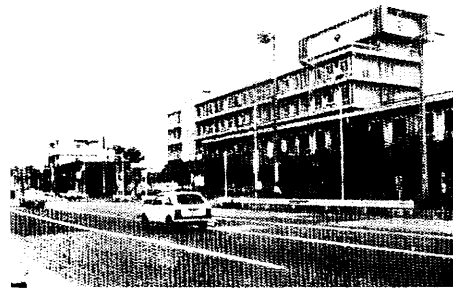
古い町並を残す根岸町



(同上)



(同上)



横浜赤十字病院

主要地方道は、根岸湾埋立の結果、拡幅・造成されたもので、これより南側根岸駅に到る道路沿いに新しい街並みが連らなっている。旧道沿いの根岸町の古い家並みとまったく対照的である。この区域には七曲公園、不動下公園が設けられている。町には普通住宅のほか、いずれも四階建のマンション七棟が建てられている。これは新しい根岸町の街並みである。ほかに、二丁目の面積のほぼ半分を占めて横浜赤十字病院、神奈川県立看護教育大学校、それに神奈川県赤十字血液センターがあり、市民医療施設がここに集まっている。

● 根岸の各町 ― 根岸地区各町が住宅地化されたのは、昭和四十

年代であった。平地も台地も建物で埋ったが、まだ台地には、老松がところどころに残されている。南面には、遠く石油コンビナートが望まれる。埋立前の景勝の地も現在は一変した。

加曾台には、日本石油の社宅、横浜電信電話公社の建物などがあり、住宅地のなかに、こうした建物がふえている状況である。根岸旭台は、不動坂を登った地点、根岸台南側に当る一帯で、マンションと広い庭をもつ住宅地域である。不動坂からの道路わきには、亭々としたヒマラヤ杉の太木が空を覆っている。邦人よりも、外人国の住宅が多いのも特徴である。マンションは、旭台ハイツ、横浜根岸台ハイホーム、根岸台ハイツなどの高層住宅である。戦後建物が接収され、あたかも外国の感を呈した痕跡はなくなっている。

旭台には、もともと外国人の居住建物が多かったが、昭和四十九年あたりからその住宅は取りこわされて、邦人の住宅になり、広がった空地には高層住宅が目立ってきている。それに昭和五十年代になると、ますます外国人の居住が少なくなり、一戸建住宅に近いマンションが次々に増加して行く傾向になっている。

●もと台地の町―これらの地域は、かつて海を目前にした台地であったが、その奥地は、根岸森林公園（根岸台）を経て寺久保や塚越の丘となり、丘の下は箕沢・大芝台・大平町、山元町の平坦部としてつづいている。

一方、根岸台わきの幹線道路から東の滝之上の台地のつづき

は、豆口台、矢口台、仲尾台、竹之丸、西竹之丸、鷺山で国鉄山手駅をはさんで立野となる。立野の丘下は大和町で平坦地となり、麦田町につづく。平坦地はつづいて柏葉、柏葉は山元町に接している。いわば根岸地区は、まとまった丘陵地の地区である。

寺久保や塚越は磯子区上町に接していて、ここには米軍住宅がある。さきに述べたように、区内に今なお残る接収地域となっている。米軍根岸住宅といわれるのがこれで、現在その接収解除のメドは立っていない。整然と区画されて、広い芝生の庭を持つ住宅は、まさに高級住宅そのものであり、ともすれば忘れられがちな「横浜にある外国」が、いまだにここに存在する。米軍住宅は、塚越に大小合わせて七三、寺久保には四〇、箕沢には一八、大平町に四、合計一三五棟の住宅がある。このほか寺久保には、米軍小学校一棟、箕沢では旧競馬場の観覧席の大建物と付属五棟が、いまなお接収中である。

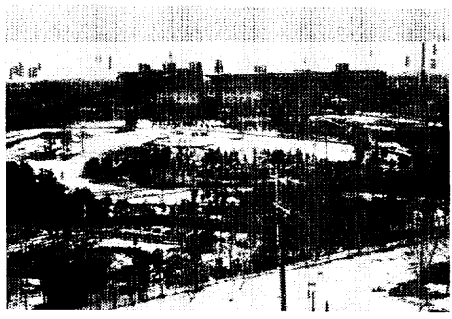
塚越には、五階建の横浜防衛施設局塚越住宅のほか、市民の建物一二棟があるだけで町の面積の一〇パーセントにもあたらない。ほかはすべて接収地である。寺久保の場合も三〇パーセント内外に市民の建物約一二〇棟を数えるのみである。ここには米軍小学校付属の幼稚園があり、六階建のビルが目立つ。

●山元町あたり―箕沢の接収地は北側の大平町寄りだが、ちょうど競馬場の観覧席の真うしろに当たっている町で、ここは一帯の住宅地である。小公園の箕沢公園、箕沢寺久保町内会館、箕沢自治

会館が見られる。温室を持つ園芸業数軒、石川牧場、根本牧場などがこの地域の旧状をわずかに伝えるかのようで、一帯は住宅地である。丘の上には、山元町保育園がある。

大芝台は、山元町二丁目から入るが、この入口あたりには商店が並んでいる。中国人墓地蔵王廟の所在地であり、周辺に住宅が多い。この町をさらに奥に入ると、横浜市根岸共同墓地がある。町域のおよそ七〇パーセントを占める墓地には、旧根岸火葬場、蓮光寺などがある。春秋の彼岸には墓参の人が多い。

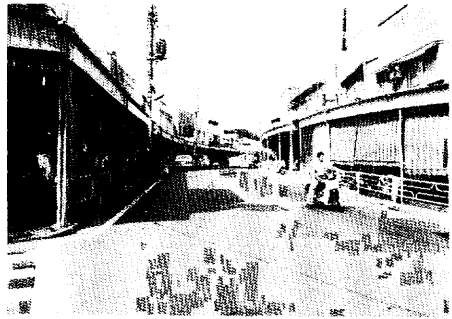
大平町もその入口は山元町二丁目で、この町は中区における寺町といえ、西有禅寺、大円院、東漸寺、円大院がある。共同墓地にそって住宅地がつぎ南区平楽に接している。



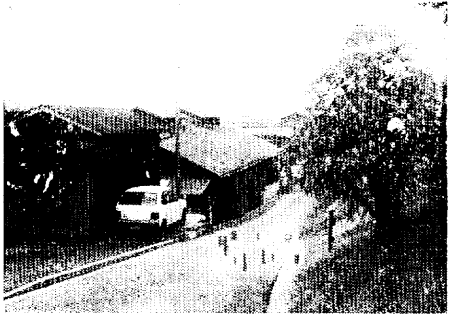
根岸森林公園と旧観覧席



観覧席を裏から見る



山元町商店街——買物客が集まる前の昼下り



牛舎のある風景（養沢所見）

山元町はこの地域の中心地である。主要地方道横浜駅根岸線が中央部を通り、道沿いには商店がならぶ。一丁目は打越橋から直線のところ、旧市電の山元町終点の位置で柏葉につづいている。二丁目には山元町郵便局、三浦信用金庫山元町支店が金融機関としてあり、集会所港陵館が町内会館を兼ねている。

三丁目は、鉄筋校舎に改築された山元小学校の所在地で、養沢の入口である。商店街は大方この辺りまでで、四、五丁目に入ると住宅地西竹之丸につづき丘下の住宅地帯となる。ここには東京電力山手変電所、同家族寮があるが、昭和五十五年三月、四丁目養沢の崖下に七階建のマンション（五、二〇六平方メートル）が建設された。五丁目にも八階建のコイボラスが建設された。この



根岸共同墓地入口付近  
改築後の山元小学校



地域にとっては、最大規模のもので、山元町の高層化のさきがけであった。五丁目には、山元町五丁目公園、滝の上幼稚園がある。また五丁目の三き路によって、竹之丸、滝之上にそれぞれ通じていくが、根岸森林公園の外周部としての美しい街路樹と相まって落着いたたたずまいを見せている。

●この辺り台地の町―豆口台は、前に述べた旧市営住宅を中心として、一帯が住宅地である。根岸加曾台隣接の地域は南面する比較的広い庭を持つ住宅が多い。豆口の入口に当るのは、H字形の地点で、仲尾台と滝之上に接する。町域には前述の築井戸稲荷がこんもりとした緑を見せている、ほかに、児童公園、豆口台上町内会、児童会館、そして福音バプテスト教会豆口子供園、公衆浴場の豆口湯もある。最近小規模な駐車場がところどころに造られているが、大手商社の寮も建設されている。旧市営住宅は老朽化が進んだこともあって、次第に建て替えられているが、前に述べたように、この地域が畑の中に早くから開けた当時のおもかげは、わずかとなった。ここも空地というべきところは僅かに崖地があるだけである。

H字形の道路一帯は低地で、北側の丘地が仲尾台であり、仲尾台中学校がある。わずかに根岸台に接しているが、道にそって横浜インターナショナル・バプテスト教会がある。

高台にある仲尾台中学校の周辺は、すべて住宅地で、細い道によって住宅が結ばれている。学校の下の方すすには、市営根岸外

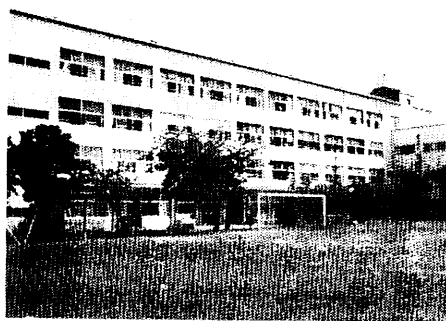
国人墓地、仲尾台公園、青少年自治会館が数少ない公共施設である。ここも住宅地だが、昭和四十六年四月には七階、四十八年六月には五階建のマンションが建設され、土地の高度利用がはじまるようにも見られたが、その後は大規模な開発は見られない。

竹之丸は山手駅わき立野小学校上の台地で、町の中央の竹之丸通りを中心とする住宅地である。ここは横浜訓盲院の所在地である。竹之丸保育園、県住宅公社竹之丸住宅四階建二棟のほか合計六棟、日本電信電話公社竹之丸住宅（三階建）、コープ竹の丸（五階建）ほか大手企業の社員住宅など、鉄筋構造の建物が増加しつつあるが、町域の根岸線第二竹之丸トンネル付近だけが、唯一の空地となっている。この地域には、開発の手はなかなかとどかないようである。

隣接の西竹之丸についても、ほぼ同じような状況である。町内には横浜防衛施設局の独身寮があるほか、個人住宅がびっしりと丘地の町域を埋めている。最近、尾根道の空地を月極有料駐車場にしている傾向が多く見られるのが、この町での特徴ともいえる。駐車場は大小一四カ所を数える。

立野は立野山といわれる台地で、根岸線山手駅の所在地である。今まで交通の便はバス路線しかなかったところへ、この駅の開設は、地域に大きな利便を与えることになったが、これも既成住宅地のため、これ以上の開発は現在のところは期待されない。

特に駅前狭く、駅前広場というようなものの余地はない。丘下



仲尾台中学校



市営根岸外国人墓地

駅前には立野小学校、丘上には横浜国大教育学部付属横浜小学校がある。この町と立野山の下の大和町にとって、前に述べたように、市民の安全を確保するための崖地の対策が大きな問題となっている。

●商店街とその付近―大和町は前にも述べたように一直線の街並みの商店街で、商店の裏には住宅がつづいている。表通りにはときわ相互銀行山手支店、大和町立野町町内会館、裏通りには横浜大和郵便局、明星幼稚園があり、竹之丸の丘すそ二丁目には神奈川県住宅供給公社大和町団地（四階建二棟）がこの町唯一の高層住宅となっている。大和町の中央道路は、バス路線で二車線の幅をようやく保っているが、その道路はすでに狭く、拡幅が望ま



横浜測盲院（正面）



国大付属小・中学校

れる。町の入口は千代崎川の覆蓋を渡った地点で、麦田町四丁目に接している。

麦田町は、麦田トンネルから一丁目、二丁目とつづき、大和町入口の四丁目までだが、主要地方道にそって両側が商店街である。一丁目は柏葉を経て山元町一丁目に通じているが、ここには麦田町内会館、青少年会館、麦田老人スポーツガーデンがある。スポーツガーデンは、老人のゲートボール会場としてひんぱんに使用されている。

柏葉はゆるいカーブを描く柏葉通りを中心として、住商混在の地域である。通りの中ごろには中区柏葉老人憩の家、柏葉町内会館がある。丘の上、竹之丸に接して柏葉公園がある。柏葉は山手

立野小学校



大和町商店街―川鉄砲場、直線に店が並ぶ



町と道をへだてているが、七階建のマンションがあり、それが唯一の高層住宅である。

鷺山は麦田町二丁目から入る尾根道の地域で、直線的な鷺山通りの両側には、住宅がつづく。道路にそって神奈川県乗用自動車健保会館がある。最近三、四階程度の鉄筋住宅が少しづつふえている。またこの町内には七戸ほどの外国人の居住住宅がある。

以上は根岸地区の現況の一端を述べたにすぎない。今後本牧地区の旧接収地の総合的開発がどう作用するか、国鉄山手駅を中心とする商店街がどう整備されるか、山元町、麦田町、大和町という商店街の振興策をどうするかなど課題は多いといえる。



麦田老人スポーツガーデン



柏葉町内会館——戦災に残りいまお町の人々の集会所となっている